２大彗星同時観測とオーストラリア大自然の旅

オーストラリア南天紀行

南オーストラリア州　アデレード・ウーメラ

2004年5月19日(水)～5月25日(火)　７日間

佐　藤　　麻　子

テネブ
札幌天文倶楽部会誌
2004 増刊号

南オーストラリア州のウーメラは砂漠の中の大平原．日本のサンプルリターン計画の試料回収は，この砂漠に不時着させて行う計画がある．要するに物が落ちてきた時に見つけやすいくらい街もなにも無い平原なのである．

① ５月１９日(水)

オーストラリアの大地へ

出発前はいつも…

出発日の 19 日、「もう朝だよ、明るくなってきたよ」と言いながら、小鳥のさえずりも聞こえ出した 4 時頃、佐藤麻子は爽やかに目覚めた。いや、何か違う。そうではなく、「もう朝だよ、明るくなってきたし。私先に寝る」と言って、目をこすりながらベッドに入ったのだ。亭主の智秀はまだトランクと格闘していた。前夜も渡辺会長とニート彗星の観測に出かけて帰宅したのは夜遅く、日付が変わってからの荷造り開始となったのだ。まずは一番大事な観測機材から、発砲スチロールを加工したパッキンで包んでトランクへ詰めていき、その隙間に各自のものを機材のクッション代わりに詰め込んだ。天文倶楽部の参加者が少ないせいか？トランク一つあたりの機材の占める割合が多いようだ。こうして海外観測遠征出発前は、いつも荷造りに時間がかかって寝不足になってしまう。二つのトランクの荷造りを終えて智秀がベッドに入ったのは、朝の 5 時だった。

札幌－千歳－成田へ

うつらうつらした数時間後、睡眠不足で余計に冴えてしまった目を二人でギラつかせながら、身支度を整えた。そして、それぞれ 20 キロ以上ある二つのトランクとカメラバッグを車に積み、小雨のパラつくなか、渡辺会長を迎えに向かう。忘れ物は無いかと、不安で一杯の車内だった。9 時 45 分くらいに厚別の渡辺会長宅に着いた。渡辺会長も寝不足のようで、千歳空港に向かう車内では、3 人の欠伸(あくび)が飛び交っていた。千歳に着けば一週間は運転する必要が無くなるので、佐藤智秀にとってはもう一踏ん張りしてもらって安全運転をお願いしよう。

羽田行きの飛行機に乗るブリッジにてまず記念の１枚

10 時 40 分頃に千歳のサンパーキングに到着して手続きを済ませ、空港までの送迎マイクロバスを待った。係の人が私達のトランクを持ち上げる際、余りの重さの為腕に筋が浮き上がり、眉間にしわが寄り、明らかに「何じゃこりゃ？」と思っているようすがうかがえた。乗り心地の良いとはいえないバスに揺られ、それでも「有難うございまーす」と言って降り、重たいトランクをゴロゴロ押して空港に入った。佐藤家二人が乗る便は、12 時ちょうど発 JAL1014 便。ところが、渡辺会長と二人の受講生は 12 時 30 分発 JAL1016 便だ。渡辺会長は、空いていたら一緒の 1014 便に変更してもらう為、チェックインカウンターへ急いだ。予約では別々の便だったのだ。

1014 便は幸い空いていたようで、5 人揃って羽田空港まで向かうことができるようになった。待合所のソファに座って市川恵子さんと阿部圭子さんの到着を待っていたが、11 時半近くに二人との待ち合わせ場所に行った渡辺会長が渋い顔をして戻って来た。「遅いなぁ～、待ち合わせ場所間違ってねぇか…」と言いながら、行ったり来たりウロウロし始めた。乗る便を一便早めたことで待合い時間の余裕が無くなっていたのである。チェックインを済ませ 3 人分の搭乗券を手にしている会長にとって遅刻はあってはならないことなのだ。というのも、会長のマイレージで 2 人の受講生は『お供でマイル』といって、国内運賃が往復 2 万円の格安チケットになっているのだ。乗り遅れたら面倒なことになる。携帯で一生懸命連絡をとったようだが、既に二人とも千歳に向かったということだった。

佐藤麻子はその間トイレタイムを取って時間を潰した。そして、海外旅行が初めてでおニューのトランクを押して歩いてくる阿部さんを発見し、後は市川さんを「遅いね、大丈夫かな。でも旅慣れてるから大丈夫か？」と言いながら待った。そしてふと気配を感じ、振り向くとトイレから出てくる市川さんがいた。何のことはない、佐藤麻子は 10 分ほど前にトイレの鏡の前で市川さんを発見していたのだった。鏡に向かって何かゴソゴソやりながら立っていた後姿だったので気付かなかったが、その独特の雰囲気はまさしく市川さんだったのだ。これで全員集合。これから一週間宜しくお願いします、の挨拶もそこそこに、急いで搭乗口へと向かった。

羽田空港からリムジンバスにて成田へ(一人3,000円なり)

定刻の 12 時に離陸する飛行機は、きっとあっという間に東京に到着するだろう。海外旅行に行く時は、東京に着いてからの時間が長いので、札幌～東京間が余計に短く感じる。海外初の阿部圭子さんはどう感じているのだろうか。期待に胸を膨らませているだろうか。しかし考えてみれば、その大事な初の海外旅行が、天文絡みのマニアックな場所で観光もろくに無し。しか

も妙なメンバーと一緒。いいのだろうか…。本当は初の海外旅行は素敵な彼氏と行こうと思っていたのではないだろうか。

そんな事を考えたり、ボーっとしているうち、本当にあっと言う間に羽田に到着し、14 時 15 分発の成田行きリムジンバスに重たいトランクと共に乗り込んだ。それにしても、東京の空気は相変わらず不味かった。息苦しく、臭く、梅雨の為かジメジメして、ずっといたら納豆になりそうだと感じた。でも今夜には東京を脱出できる。そして、私たちを待っているのは、オーストラリアの大地と満天の星空なのだ。

成田空港にて

高速道路を降り、ゲートでおきまりのパスポートのチェックを受けた後、成田空港第 2 旅客ターミナル 3 階に 15 時 20 分到着した。

集合時間は 18 時 45 分の予定でまだ 3 時間以上ある。これから出発までが長くなりそうだったが、ターミナル入り口近くのソファにトランクと共に陣取り少し落ち着いてから、空き時間を利用して荷物の番兵を順番でし、各々の食事などの用事を済ませることとした。まず、渡辺会長は円をオーストラリアドルに替える為、「観光もねぇし、小遣いは少なくていいか…」と言いながら両替所へ向かった。3 万円分を交換したようだ。ちょうど 30,018 円で 340 豪ドル(1 豪ドル 88.29 円)と言っていた。佐藤智秀・麻子は昼食に讃岐うどんをすすり、前途を祝して軽くビールで乾杯。その後、交代でコーヒータイムを取ったり、渡辺会長は文化センターの受講生 2 人と機内食が苦手なので夕食代わりにカレーライスを食べに行ったりしていた。後はひたすらおしゃべりし、成田空港に居た為か海外旅行の話しに花がさいた。

18 時、渡辺会長が添乗員の須原さんを見つけてくれて再会し、お陰で集合時間の 18 時 45 分を待たずに、搭乗手続きをはじめることができた。トランクは予想通り重く、佐藤家の物には「27kg Heavy」と書かれた札を付けられた。そこで渡辺会長と市川さんはは ETAS(電子渡航許可)の証明書類を、阿部さんは ETAS と出入国書類を受け取った。佐藤智秀・麻子は、インターネットを使って自分で ETAS を取得したので受け取るものは無かった。渡辺会長に「あれっ、自分で ETAS 取ったの？取れるって書いて無かったよなぁ～」と言われたが、手数料 4,200 円を浮かせる為に頑張ったのだ。しかし、世の中便利になったものだ。ETAS はインターネットで意外なほど簡単に取得できたが、今までのビザと違ってパスポートに押印が無いので、出入国審査の際にトラブルは無いと分かっていてもチョッピリ不安な面もあった。ま、「何か有ったら添乗員に言ってください」と旅行会社の人にいわれていたので、手違いが有っても何とかなるさと思った。

その添乗員、須原さんにお世話になるのは、佐藤智秀・麻子は 2001 年のアフリカ遠征に続き 2 度目、渡辺会長は、アフリカ・オーストラリア・アリゾナ・ベネズエラなと今回 4・5 度目とか。長旅を何度か一緒にすると、もう旧知の仲の雰囲気だった。そして彼は、相変わらずひょうひょうとしていて、頼りになるのかならないのか分からない雰囲気だった。チェックインカウンターの女性職員とのやり取りも、スムーズとは言いがたいものがあった。アフリカ遠征の時は、「英語の勉強不足でスミマセン」と、現地の人が言っていることを訳せなかった時があったが、それ以降、英語の上達はしたのだろうか…？ 間食と居眠りが上手な須原さんは、今回も移動中のバスの中で舟をこぐ姿を見せてくれることだろう。

荷物を預けて身軽になった一行は、再集合の 19 時までの時間、再びソファに座って休むことにした。そこにドヤドヤと、女性多数男性一名のハーレム状態の、賑やかなおじさんとおばさんの団体がやってきた。その迫力に圧倒されていると、さすが中高年キラーの渡辺会長、楽しそうに彼らと談笑していた。渡辺会長は、なにやら「おばさん…」と声を掛けてしまったらしく、「独身だからお姉さんだよ！」と注意を受け、「スイマセン」と、頭をポリポリ掻いていた。何となく清掃会社の同僚たちか？ という雰囲気だったが、中には「主人が亡くなったからハワイでも行こうと思ってサ」と話している人がいたりして、大いに盛り上がった団体だった。彗星を見に行くマニアックな団体とは訳が違うようだ。しかし、こちらも負けずにオーストラリアの大地で、満天の星空を見ながら大いに盛り上がること間違いなしだろう。

ようやく赤道越え

札幌を出てから約 11 時間、思えば長い道のりだった。いや、待ち時間が長かったのか？ とにかく 20 時に成田発シドニー行きカンタス航空 QF022 に搭乗した。ジャンボ機の通路は挟んだが、5 人並んで座席に着いた。直ぐにアメニティーグッズが配られた。ストラップつきのパスポートサイズの袋にアイマスク・歯ブラシ・機内用の靴下が入っていた。渡辺会長と佐藤智秀は、「こ

最初の機内食に挑む初海外の阿部さん(手前)と市川さん

りゃぁ、良いわ～」と言いながら早速靴下を履き、パスポートを袋に入れて首から嬉しそうにぶら下げていた。そして離陸。外は暗く窓に雨滴が垂れていた。日本の地を離れ、ようやく南の大地を目指して上空へ飛び立った。

消灯時間になるまで、国際線の中は乗務員も乗客も結構忙しい。次に配られたのは夕食のメニューだった。寿し・鶏肉の赤ワイン煮とポテトまたは牛丼・オレンジプディングなどと書かれてあったが、渡辺会長は機内食が苦手なので、「うわぁー、食えないぞ、こんなもん」と渋い顔をしていた。しかし、食事が届き、食べてみると意外と美味しく、旅なれた市川恵子さんはペロ

リと食べ、国際線機内食デビューの阿部圭子さんは、好奇心も手伝ってか美味しそうに食事をしていた。

そして渡辺会長でさえ「うまいうまい、問題ない」と、パン以外殆ど平らげていた。当たり前か…、まだ日本である。これら機内食は成田でつくられたものだ。あっ、そう、国際線の機内食には何が何でもパンが付くことが多いようだ。寿司とかご飯物が有っても、数を消化する為だけのようにチョコンとのせられている。しかもパサパサ。ま、仕方ないのだろう。

そんな中、お勧めはニュージーランドへ行った時乗った大韓航空の機内食だ。客室乗務員も美しいし、その機内食のビビンバが、なかなかイケるのだ。好みは有ると思うが、機会が有ったらお試しあれ。

国際線の朝は早い。赤道をまたぎ、日付が変わった 20 日は 4 時に機内の灯かりが点けられ、頭に血が回らないうちに和食か洋食か尋ねられ、寝ぼけ顔のまま朝食を食べさせられた。延びきった蕎麦・ポソポソの焼き鮭・スポンジのような卵焼き・味の濃いきんぴらなど、機内食ならではの朝食だった。渡辺会長は余り睡眠がとれなかったのかお疲れ気味のようすで、「食えたもんじゃねぇ…」と、蕎麦だけペロリと食べていた(ちなみにこれも成田で積み込んだ食事です)。

その後、洗面などを順次済ませたり、固まりつつあった足の運動をしている内に、いよいよオーストラリア上空に入ってきた。

日本とオーストラリアの経度差はほとんどないため時差ボケはない．夜行便では朝到着となるのでしっかり寝ておかないと，着いてから丸一日の行動になる．これがこたえるのだ．

クイーン・アデレードの名の付いたワインのラベル．アデレードの町の語源がこの彼女なのだ

② ５月２０日(木)

文化と芸術の街アデレードにて

シドニーを素通りし、アデレードへ

オーストラリアのシドニー空港に着陸したのは、朝の 6 時 45 分。季節は秋だったが思ったほど寒くは無い。荷物を受け取り、入国手続きを済ませる。日本から持ち込む食べ物チェックはとても厳しく、おやつ程度のものも申告するようにといわれたので、佐藤智秀は成田空港で買ったゴマ煎餅を、トランクを調べている怖そうなお兄さんに申告した。すると、「さっさと行け」と言わんばかりに、ペッペッと手をはらって軽くあしらわれた。渡辺会長も、アメリカ入国時のように別室に連れて行かれることも無く、皆な無事に入国できた。

8 時過ぎに、アデレードまでの国内線乗り継ぎの為広い空港内をバスで移動し、集合時間まで一時間以上有ったので、カフェで時間を潰すことにした。セルフサービス式のお店に入り、並んでコーヒーを頼んでいると、渡辺会長がやってきて、「俺も」と頼んで行った。お店のお姉さんに「もう一つね」とお願いして、コーヒーを運ぶ時に、佐藤智秀・麻子はエスプレッソを頼んでいたことに気がついた。渡辺会長のお口には合わないかもしれないが、知らん振りして「チョッと濃いですよ～」と差し出した。案の定、「ううぇっ、濃いなぁ～これ！」と顔をゆがめていたが、多分初体験でないかと思われるエスプレッソを、最後まで頑張って飲んでくれた。［編集注：飲んだことあります，渡辺］すると、どこからともなく現れた添乗員の須原さんも同じテーブルに加わり、添乗員として同行してくれた海外の思い出話などをして休息をとった。市川さんと阿部さんは、とても元気で、「シドニーは素通り・観光が無い・お土産が有るような場所には行かない」などといった事前情報に脅されて、今のうちとばかり家族や職場の人へのお土産を探しに行っていた。

広い空港でのアデレード便乗り継ぎは，ちょっとした休息時間でもある．空港内のカフェで濃いエスプレッソで目覚まし．

9 時 45 分に再集合し、シドニー発アデレード行き・カンタス航空 QF747 に乗り込んで、南オーストラリアの州都へ向けて飛び立った。国内線は国際線とは雰囲気が変わり、客室乗務員の年齢層が少々お高めで、体

格もガッチリした人が多かった。そしてまた、機内の忙しさが始まった。すぐさま、甘くて硬くて食べられたものではないクッキー・リンゴ・水の入ったおやつの箱が配られ、ゆっくりコーヒーを飲む間もなく片付けに来た。

離陸して 1 時間半ほどでアデレードに着陸。残念ながら空は曇ってはいたが、久し振りに地上に足を降ろしたことに安心感を覚えた。しかも、ついにここは南オーストラリアの大地なのだ。心臓の鼓動を少し感じた。

アデレードの街へ

荷物を受け取った後、お昼過ぎにアデレード空港前から貸し切りバスで南オーストラリア州の州都アデレード市内へ向かった。ここから最終日まで案内してくれる、現地の日本人ガイド「 KYOKO(片山京子)さん」という、長いお下げ(死語か？)をした、素朴だけれども明るくて声の良く通る女性と対面。オーストラリアに来て 9 年目ということだったので、通訳の苦手な添乗員の須原さんは、一安心だろう。そして運転手「ルーさん」も紹介された。スラリと背が高く、陽気な外国人という典型の、明るいおじさんだった。

その楽しい二人の案内で、19 度くらいの、過ごしやすい気温のアデレード市内のプラタナス並木を走った。アデレードは夏は雨が降らず冬に雨が多く、雪は殆ど降らないらしい。その夏の乾燥した気候の為か、山火

現地添乗員は実はアルバイト？普段は日本語放送のディスク・ジョッキーとしてアデレードで活躍する片山京子さん

事と戦う消防士は、ヒーローとして尊敬されているとのことだった。走るバスの窓から見ていると、当たり前のようにユーカリの木が生えていて、オーストラリアに来たことを実感した。さすがにコアラが樹につかまっている姿は見なかったが…。そんな中、「たれパンダ」を後部座席の背もたれに並べた車を見かけ、一瞬日本に逆戻りしてしまった。

落ち着いた雰囲気で整然とした街は、イギリス領土時代に、アデレード建設の父と呼ばれるウィリアム・ライト大佐が 1836 年から設計を始め、ヨーロッパからの自由移民によって成り立った都市だ。ヴィクトリア広場を中心に碁盤の目のように道が整然と通じている。そこは札幌市中心部とよく似ている。人口は 105 万人、オーストラリアで 5 番目に大きな都市だ。市内の中心を 1929 年から走るトラムは、現在たったの 1 本になってしまったらしく、時代の流れを感じさせる街でもあった。

その時、ハンドルを握りながらもひっきり無しにしゃべっていた運転手のルーさんが、奇声を上げた。何事かと皆な心配したが、その日の朝は有名なラジオスターに会い、その時は人気のあるオーストラリアのテニスプレイヤーを運転中に見かけたらしい。それで「なんと自分はラッキーなんだ！」と、思わず喜びの雄叫びを上げたのだった。明るいのは良いけど、「しっかり運転してくれよ～、頼むよ～」と、参加者の何人かが訴えていた。一瞬心配しなかった訳ではないが、ガイドの京子さんよりも喋り続けるルーさんは、ほんとうに陽気で楽しい運転手に違いなかった。それにしても、その度に訳の分からない内容を通訳しなければならない京子さんもたいへんだ。

久々の…ちゃんとした食事

街の中を走り、13 時半過ぎにアンリーロードに面した住宅街の中にあるイタリアン・レストラン「 La Tombala 」に到着した。随分と郊外のようだったが、よほど売り込みがうまいのかツアー客でもなければやってきそうにない店だった。考えてみれば、久し振りにクロスを掛けられたテーブルに向かい、きちんとした椅子に座って味わう食事だった。そんなことを考えると、何か妙に嬉しくなった。しかし、食事時間は一時間も無いらしく慌しくなりそうだった。

先ずはミネストローネが運ばれたが、久々のまぁまぁの美味しさだった。魚・エビ・イカのグリル、オーロラソース・アボカドソース添え、スモークサーモンカナッペ、生野菜等が次々テーブルに並び、ビールやワイン等を飲みながら皆なモリモリ食べた。

お腹が満足し始めると、話しのネタ探しだった。10 人位ずつに分かれて座ったが、同じテーブルにいた一組の妖しい若いカップルのことが皆な気になっていた

オーストラリアでの最初の食事に期待されたが，無難なイタリア料理だった

ようで、矛先がその二人に向けられた。女性の方は葛飾区のプラネタリウムの職員とのことだった。そんな二人は、誰が見ても夫婦か親密な関係に見えるのだが、「ただの高校・大学の先輩後輩ですよ～」とごまかしていた。「ただの…」だったら、こんなマニアックな場所に仲良く二人では来ないだろう、との、殆どの人の見解だった。「ほっとけ！」と思われる突っ込みだが、テ

ーブルを囲んでワイワイと談笑するのも、皆なで前を見て座っていた機内やバスのことを考えると、久し振りのことだった。

文化・芸術の街

一時間半ほどの昼食時間を終え、文化・芸術の街といわれるアデレード市内を、またバスで巡る。そもそもアデレードという名前は、イギリス領土時代の 1836 年に付けられ、それは、ドイツ語で「貴婦人・小さいけれど美しい」という意味の、ウィリアム王の愛妻の名前だそうだ。確かに女性っぽい名前だ。

住宅街に入ると、歴史のある古い地域には、日本以外の先進国には珍しい電柱にお目に掛かった。石造りの家が多いのは、地震が無い為と、木造にして生息数の多い白蟻に食い荒らされないように、という理由だった。高層ビルが少なく、飛行機が低空で降りてゆく姿を見た。

アデレードは歴史の有る街だけあって、古い教会がたくさん有る。大きな教会ではホーリー・トリニッジ教会、聖フランシスコ・ザビエル教会やセントピーターース大聖堂が目立っていたが、大小合わせると 22 軒ほどの教会があるとのことだった。その“セントピータ

市内の北にある高台に位置するセントピーターース教会

ース大聖堂”の辺りを少し散策しながら、“ライト展望台”にあるアデレード建設の父「ウィリアム・ライト大佐」の銅像を仰ぎ見て記念撮影をした。ライト大佐のポーズは、クラーク博士よろしく、「あの街をご覧！」と、誇らしげにアデレードの中心部を見下ろしていた。

アデレード市内を見下ろすライト展望台(あいにくの曇天)

ライト大佐が誇らしく思うだけあり、アデレードは「ニューヨーカー」という雑誌で「治安が良く、美しく、住みやすい街」という表彰を受けたことがある。そのことと比例してか、中心に近い所での平均的な広さの一軒家の値段は 4,000 万円位と意外に驚きの値段。安くても 2,500 万円位だという。やはり居住条件が三拍子揃ったところは、世界各国共通で高い値段が付くらしい。

バスに戻ってから、セントピーターース大聖堂に来た時に通ったキングウィリアム通りを少し戻り、ノーステラス通りに有る南オーストラリア博物館と南オーストラリア美術館を見学した。渡辺会長が「市内にはこれくらしか見るものがない」と言っていた。昨年 6 月に皆既日食で訪れ、今度が 2 度目なのだ。同じ通り沿いにはアデレード大学と南オーストラリア大学があり、学生らしき若い人々が行き交っていた。博物館は 1856 年の設立で、その広い建物の中に南オーストラリアに生息していた恐竜や現代の動物、先住民アボリジニに関する豊富な数のコレクションが並んでいた。正面玄関が工事中で裏側に回ってから入館した。

南オーストラリア博物館のホール(白枠は隕鉄)

アボリジニの展示物には、アイヌ民族の生活文化と似通った部分が多く、何処の国も、先住民には共通する歴史があることを感じた。どの展示物より子供の絵(紙芝居)のようなスケッチを見ただけで、迫害のようすが伝わってきた。当時は黒人の奴隷、それ以下に扱われていたようた。入り口のエントランスに巨大な隕鉄が展示されていてみんな記念写真を撮っていた。

すぐ隣に有る南オーストラリア美術館は 1881 年の設立。重厚な趣の有る天井の高い建物の中に、18 世紀オーストラリアの絵画・彫刻等、16 世紀くらいから現在のヨーロッパの美術品の数々が展示されていた。名も知られない州都にこれだけの西洋絵画が収蔵されていようとは思ってもみなかった。例えば札幌 180 万人の美術館と比較したらよく分かる。民度の違いはこうい

いかにも美術館という重厚なたたずまい．入場は無料だった

うところに出てくるものだと思った。一時間程度の見学時間だったが、南オーストラリアの文化や芸術の歴史に、少し触れることができた。

アデレードの夜

半日市内観光を終えてその日の宿泊先、「ホテル・アデレード・インターナショナル」に到着したのは、16 時 50 分だった。アデレード市内の北に位置する、団体旅行者受け入れ型ホテルだ。渡辺会長 619 号室、阿部さん 308 号室、市川さん 601 号室、佐藤智秀・麻子 416 号室と部屋は離れていたが、取り合えずそれぞれの部屋に落ち着き、久し振りのベッドの感触を味わうこととした。部屋は、狭く至って普通。他の部屋も同じだろうか…。しかし、トランクを置く台は小さくてまともに乗せられないし、二つのベッドの大きさは違うし、しかも一つはキャスター付きでストッパーがないときた。部屋の狭さから考えると、一つはエキストラベッドのような気がした。ま、一泊しかお世話にならないし、布団にくるまることができるだけでも幸せか…。

夕食前にスーパーへ買い物に行った。明日の朝食は

いたってシンプルなホテル・アデレード・インターナショナル

割別料金で、ホテルで食べると 2,000 円位掛かるために適当に食べることにし、その仕入れをしなければならない。何せ、明日は“ウーメラ”という村に移動するため、街らしいところに泊まるのは今日一晩だけ。そのウーメラに着く前に、主だったものを少し仕入れておいたほうが良いとのアドバイスを受けていたのだった。スーパーに向かう途中で添乗員の須原さんと会い、一緒に探索に向かった。

通りには小さなスーパーしかなく、どこまで行けばいいのか分からなかったが、お店で聴くと大きいのが 300m くらい北にあった。しめしめ、これで豊富な食材が調達できるぞ、と思っていたら同じツアーの参加者の面々に出会った。皆んな、ウーメラでの食事が心配なようで、真剣な顔で買い物をしていた。私たちは、果物が美味しそうだったのでバナナやオレンジ、ブドウ、プリン、朝食用のサンドイッチ・サラダ・水など、ショッピングカートにたくさん入れた。買い物は楽しかったが、ホテルへの帰り道、パブやレストランで楽しそうに過ごす現地の人を見かけ、街中を探検したい衝動にかられた。しかし、今回の海外遠征は観光も探検も我慢…なのだ。

ホテルの夕食は 19 時からだった。だだっ広い団体用のエリアの 3 つのテーブルに別れて座った。私たちのテーブルは、渡辺会長以下 5 名と、昼食を食べたイタリアンレストランでからかわれていたカップル、そして道職員で現在根室勤務のお酒好きの小畑さんだった。ワインやビールを飲みながら食事をしたが、まずはパンがバスケットに入れられて運ばれた。早速、渡辺会長が一つパクリ。そしてパンプキンポタージュ。これがドロドロで、ミルクで延ばし忘れたんか？パンプキンピューレか？と思ってしまうほどだった。味も塩っぱく不味かった。

ところがそれからが長かった。待てど暮らせど料理が運ばれてこないのだ。日本人がセッカチと言われればそれまでだが、それにしても遅すぎた。普段飲みに行ったりすると、2 時間 3 時間はあっという間だが、その日は皆んないささか疲れていた。料理がきたら一緒にパンを食べようと思っていたのだが、手をつけていないパンを見て、痺れを切らした渡辺会長が「食べないとパン無くなるよ～」と言いながら、口の中に放り込んでいた。ようやくメインが来たが、魚料理のお皿は大量のフライドポテトの方が目立っていて、渡辺会長は「ポテトが美味しそうだな、ブロッコリーはどうでも良いけど」とカリフラワーを見ながら言う始末。肉料理に至っては、ペラペラのハムのような味の無い牛肉だった。しかも、サービスの遅さで渡辺会長は余りにも疲れてしまったのか、ホテルの人が回収しているパンの残りを見て「あれはバナナケーキか？」という始末。デザートのチーズケーキやチョコレートケーキは食べられる代物ではなかったし、最後のコーヒーには、渡辺会長はミルクを大量に入れ、「上手くないわ」と言いながら、渋い顔で締めくくった。食べ物の文句を言うなんて贅沢な話しだが、日本食が恋しくなった訳ではなく、日本の食の豊かさと味付けの巧みさを改めて感じた。

21 時過ぎに佐藤智秀・麻子の部屋でお口直し。スーパーで買ってきたブドウをつまんだ。なんとも甘く、その夜食べたものの中で、一番美味しく良い口直しになり、悪い夢を見ずに済みそうだ。明日の朝は 7 時 30 分にバス集合。いよいよ彗星観測地ウーメラへの長旅だ。渡辺会長は、西側の部屋だったので、低空を双眼鏡で探して見たそうだが何も見えなかったと言っていた。

外観に似つかわず綺麗な部屋の内部

明日の夜間の天気を祈って、久しぶりのベッドにもぐりこんだ。

③ ５月２１日(金)

ひたすら走り、ウーメラへ

ひたすら真っ直ぐな道

21 日の朝は、6 時前には起床し、部屋で昨晩スーパーで買っておいたサンドイッチ・サラダ・ジュースなどで朝食を済ませた。7 時半にバスに集合だったが、何名か遅れてしまった人がいて、さすがの添乗員の須原さんも少々険しい顔になっていた。無事に皆な集合し、

人数が少ないためバスの中は比較的ゆったりとしていた

観測地ウーメラまでの 483km、約 7 時間のバス旅行が始まった。新しい運転手さんがハンドルを握っていた。ダレンさんという、熊男のような物静かな感じの人だった。ガイドの京子さんによると、ダレンさんは夜になるとはじけて賑やかになる、と暴露していた。前の運転手ルーさんも同乗していたが、二人で交代して長距離を運転してくれるらしい。バスの後部には、カーテンで仕切られた仮眠ベッドがちゃんと有り、設備が整っていた。

1 号線を北へ北へひたすら走り先ずは昼食場所の“ポートオーガスタ”を目指す。常時、時速 90 〜 100 キロで走り、10 分ほどすると殆ど家が無くなった。見渡す限り…何も無い。南オーストラリアの大地・大地・大地だけしか目に入ってこなかった。暫く走ると、大地が白っぽく見える地域に入った。それは塩湖だったが、山の上から見ても相当の広範囲で白く見えるほどの広さらしい。その他の作物としては、ベトナム移民の人たちが、アジアの野菜を作っていたり、地中海的気候が適している為オリーブを育てていたり、小麦・大麦の畑もあるとのこと。しかし、大きく広がる景色の中で、もちろんその人影などは確認できるはずも無かった。

窓から見えるのは大地、フロントガラスから見えるのはその大地に続く、ひたすら真っ直ぐな道だった。延々と続き、もしかして終わりが無いのではないかと思ってしまうほどの直線だった。

街までまだ遠い

9 時頃、バスはガソリンスタンドに寄り、休憩時間を

夜の地球を人工衛星が撮影した写真．エネルギー消費国の状況が手にとるように分かる．赤→の位置がウーメラ

設けた。皆な身体を伸ばしたり、少しブラブラしたりして気分転換をしていた。間食を摂るのが上手な添乗員の須原さんは、気が付くと「ミートパイ位しか食べられるものが無いんですよ～、モグモグ…」と言って、食べながらニコニコしていた。

道路を挟んだ反対側にある小さなお店で、紙パック入りの Farmers Union 社の“ミルクコーヒー”を買って飲んでみると、なかなか美味しかった。すると、店の前のベンチに座りながら、運転手ルーさんも「これ最高に美味しいよね！」と言いながら同じ物を飲んでいて、「これ、日本で輸入したら、億万長者になれるよー」と教えてくれた。日本にこんな美味しいコーヒー牛乳なかは無いと思っている。そこで「逆に、日本へ輸出してみたら？」と思ったが、ダレンさんも「うんうん」と頷きながら微笑んでいて、会ってから初めてみるダレンさんの笑顔と最初から陽気な笑顔のルーさんと、一緒に写真に納まってそれ以上は突っ込まなかった。

左がルーさんで右がダレンさん．中央がわたくし佐藤麻子

休憩後、雨水で小麦や大麦を作っている農家や、無農薬農業の地帯を走った。蕎麦やうどんを作っている会社も有るらしい。

ロッキイルという村の辺りには小さなソルトレイクがあり、そこには何と、そこの名物ロッキイルモンスターが住んでいるらしいのだ。バスからも絶対見ることができるというので、運転手ルーさんの合図で、言われる方向を見ることにした。ネッシーとかクッシーの類のものだろうが、“絶対見られる！”というのはどういうことなのだろう。そして名前が「ブリジストン」と言うそうだ。「ん？」と思って運転手ルーさんの言う

この辺りでいつも見られるロッキイル怪獣

方向を見てみると…、確かにいた。しかも親子で姿を現してくれ、タイヤを並べて作られたその背中を、惜しげも無く私たちに披露してくれていた。要するに塩湖の浅瀬にタイヤを幼稚園の遊具のように並べてあるだけの代物。

変化に乏しい景色と程よいバスの揺れと疲れの為か、渡辺会長は眠りこけていた。添乗員の須原さんも例外なく、夢の中にいた。運転中のダレンさん、ガイドのように喋り捲るルーさん、本物のガイドの京子さんに、ツアー客の面倒を任せきっているようだ。

10 時半過ぎに運転手が交代をし、ポートオーガスタへ向かって北へとバスを走らせた。ほんの少しづつだが街らしき所に近づいているのは確かなので、あともう一息だ。

ポートオーガスタへ

11 時近くにスペンサー湾の海が綺麗に見える“ポートピリー”という街を通過した。そこは銀の街で、銀を掘りつづけて無くなってしまうと街が死ぬ、と言われ、最近ではマグネシウムの発掘にも力を入れるようになったそうだ。港町なのに山の発掘で成り立っているとは、面白い話しだ。少し北に行くと“ポートジャーメイン”と街があり、そこには以前湾の沖に向かって 2km 位の桟橋が有ったのだが、嵐で崩壊してしまい、現在では 1.3km になってしまったらしい。こちらは港町らしい話しだった。

運転するのに忙しいはずのルーさんの話しはずーっと続く。「しゃべるのも良いけど、ちゃんと運転してくれよな～」という声もチラホラ聞こえていたが、おしゃべりすることがルーさんの眠気覚ましなのかと思えてもきたので、ありがたく話しを聴くことにした。

少しでも街らしきところを抜けてしまうと、またすぐに広大な大地が広がる。道の脇から少し離れたところに、白き管が延々と続いているのを見つけた。それは、厚さ 20cm のコンクリート管の周りが鋼鉄で覆っている物で、何千キロも続く水のパイプラインだった。水道管が地上を走っているなんて、日本で、しかも冬の凍結がある北海道では有り得ない光景なので、真っ直ぐ続く道に平行してつながる、いわゆる、人の命につながるパイプラインを、バスの窓におでこを付けて見入ってしまった。

北へ進むわれわれの右手に平行にフリンダース山脈が続く

ポートオーガスタはスペンサー湾の末端の少し南にある、自然と触れ合う様々なアクティビティーの窓口と言える街だ。散策やハイキング、ハングライダーを楽しめるフリンダース山脈は、ポートオーガスタの北から北東へ 480km も連なる、隆起してできた山脈だ。

ポートオーガスタに着いたのは 11 時 40 分。スペンサー湾に面している四つ星モーテル「Comfort Inn」のレストランで昼食となった。明るい陽が入る小奇麗なレストランだった。昨晩のものより何倍も美味しく感じたパンプキンポタージュ・キングジョージホワイトという白身魚・ベイクドポテト・サラダなどがメニューだった。単純にポテトとサラダが一番美味しく感じた。市川さんと阿部さんは、好き嫌いが無いらしくいつも美味しそうに食べている。旅行では、それは体力維持の為にもとても大切なことで、特に海外旅行デビューの阿部さんは、今後どこの国に行っても何でも食べてみて、楽しむことのできる人のようだ。

同じテーブルには地の果てまで行ったとしても何にでも食らい付き、他の人を蹴落としても生き抜けそうな元気なおじさんがいた。JAF(日本自動車連盟)にお勤めの内野昇るさんだったが、全く人のエネルギーを吸い取ってしまいそうな勢いを、旅行初日から発していた。半年前の 8 月には火星観測ツアーでフロリダ旅行も渡辺会長と一緒だったという。しかし、渡辺会長が天文インストラクターとして数々のツアーに参加しているのは、仕事としてで高額な報酬をもらっていると思っていたらしく、「違う違う！全く違う！趣味だよ趣味！皆なと同じ参加で、ボランティア…」と、渡辺会長にしっかりお灸を据えられていた。

いずれにしても楽しかった食事を終え、12 時 45 分に“ポートオーガスタ”の大きな“タウンセンター”で最後のスーパーマーケットにバスで乗りつけた。ウーメラで過ごす 3 日間分の朝食の為のパンとバター、ジャム、水、ジュース、果物などをカートに次々入れ、量り売りのハムを太っちょで肝っ玉母さん風のオバサンのカウンターで、チーズを可愛いお姉さんのカウンターでお勧めを聞きながら買った。斜め向かいにあるリカーショップでワインも仕入れた。スーパーもリカーショップも、同じツアーの人たちで盛況だった。やはり現地人と接するお買い物は楽しかった。時間の関係で、めちゃくちゃ忙しい買い物だったが…。

あと一息

スーパーマーケットの駐車場を出たのは 13 時 40 分、ウーメラまでは 87 号線を北に向かって走って、残りあと 180 キロだ！ アデレードを出てから長い長い道のりだった。お陰で、南オーストラリアの大地の景色も既に満喫できた。しかし、まだ地平線の見える景色と付き合わなければならないのだが、その真っ直ぐな道の向こうは曇だった。地平線の辺りが雲に覆われいる。まるで雲の中に向かってバスを走らせているようだ。観測地のウーメラの天気はどうだろうかと、皆な心配そうだった。

周囲に高い山など無くなり360°地平線が続く

窓の外には、エミューの姿が見えた。初めて見る動物だが、ダチョウに似た感じで首が長く大きかった。オーストラリアだけの動物だと思っていたが、地名は忘れたが、日本で食用に飼育している場所があるらしい。子育ては父親がするらしいが、脳の大きさは親指の先程しかなく、いわゆる鳥頭だそうだ。大鷲もみえたがバスからかなり遠くを飛んでいて、普通の鳥サイズにしか見えなかった。動物を発見すると、俄然オーストラリアっぽくなってくるが、カンガルーにはなかなかお目にかかれない。彼らは夜行性なのだ。運転手のルーさんによると、カンガルーが夜間に車にひかれてしまうことは、日常茶飯事なのだそうだ。時速 100 キロ位で走っていて、カンガルーをよけた方が事故につながるので、ぶつかった時に車のフロントが壊れないようにカンガルー用バンパーが付いていて、発見してもそのまま「バンバンッ」とひいていってしまうとのこと。早朝のドライブで車にひかれた死体が転がっているのを見ることは、珍しくないらしい。

強力なバンパーは動物を跳ねても大丈夫なようにできている

カンガルーにはお目にかかれなかったが、羊の放牧場の有るところをおしらせてくれた。9 月が毛狩りの時期なのでまだ見た目は大きいはずだが、羊が群れている場所が広く、放牧場も近そうに見えて実はとても遠く、羊が全くいないようだったが、何とか目を凝らしてやっと見えたのは、点状の羊だった。広範囲に広がっている羊を追う羊飼いは、さぞかし大変だろうと思ったが、風上に向かうという羊の習性を利用する為、風の向きを常にみているらしい。

乾燥しているように見えて、実は水分の多いソルト

ブッシュという低木や、西条秀樹の好きなブーメラン作りに使われるアカシア種のモルガという木など、日本では見たことも無い植物を窓から見たり、食事と忙しい買い物の後で眠気に襲われているうちに、ウーメラに近づいてきた。そのウーメラは人里離れた雰囲気としか情報が無かったので、どんな所か想像が膨らんだが、とにかくあと一息で到着だ。しかし、雲が気になる。

人口、一気に増える

南オーストラリア州の州都、アデレードを出発して北を目指してから約 8 時間。483km の長い旅が終わろうとしていた。15 時 30 分頃、“ ウーメラ ” という村に差し掛かったが、200 人いるらしい住民の姿は見当たらなかった。と、思ったら、公衆電話を使っている男性を発見。が、子供の姿は全く見当たらず、200 人さえ本当にいるのか？と思うような静けさだった。ツアーの団体が来て、人口が一気に増えた感じだ。村自体は、綺麗に整備されていて道も広々としていて高い建物は無く、小じんまりと住み心地が良さそうに感じた。

エルド・ホテルは豪州で一般的なモーテル風ホテル

ウーメラの「エルド・ホテル」は部屋数 270 と言う割には建物自体は高層でもなく大きくもなく、奥行きが相当あるのかと思ったが、バスを降りたところはセンターハウスで、その周りに宿泊施設が何棟かに分かれて建っていた。渡辺会長以下 5 名は、RED STONE と名前のついた棟だ。出発前の情報では、フロントは夜間は不在になる、外部からの電話は夜間は通じない等々、劣悪な雰囲気しか伝わってこず、少々緊張しながら向かった。2 階建の RED STONE の外階段を上がり中に入る。入ってすぐに 2 階へ上がる階段があり、市川さん・阿部さんは 2 階の部屋へ。渡辺会長も 2 階だったが観測機材組立ての為、1 階の佐藤の部屋へ一緒に向かった。廊下を進むと、棟の中央付近に共同のトイレとシャワールーム・洗濯機コーナーが通路の両側にあり、勿論シャワールームはカーテンのみで仕切られていて、ドアは無い。少し進むと各部屋のドアが並んでいた。

ホテルの看板とプラグの形状

RED STONE棟．車は周囲に停めるモーテル形式

鍵を開けて恐る恐るドアを押した。すると、そこには思っていたより広々とした空間が広がっていた。まずはテレビやアメニティーグッズが置かれているダブルのベッドルームがあり、その隣にもう一つクローゼットの置かれたツインのベッドルームがあったのだ。バスルームはどんな感じかドアを開けてみると、ガラス張りの半畳ほどのシャワールーム、隣に洗面台、そして仕切られてトイレがあり、窓から陽が差して明るいバスルームとなっていた。予想の何倍も広く良い部屋で、3 日間快適に過ごせそうだ。渡辺会長は「これなら、ここを機材の部屋にして、俺がこっちの部屋(ダブルの部屋)に寝れば 3 人で過ごせるんでないか？なぁ」と、共同生活宣言をした。ま、それもありか？ と思ったが、きっと、美香さんがいなくて寂しかったのだろう。その寂しさを紛らわせることができるなら、夫の佐藤智秀を献上する覚悟はできていた。

荷物を開け、機材組立てを始めた。3 人のトランクに分散して詰め込んだものを引っ張り出す。忘れ物が無いか、ハラハラしながら組立作業を見守った。三脚・赤道儀・電池ボックス・コントローラー…。何とか作業が終わったが、夜間の防寒対策の準備もしなければならない。さすがに天文倶楽部のジャンパーは持って行かなかったが、暖か下着やタイツを身に付け、「暑い暑い」と言いながら皆なで荷物を運び出した。

17 時 30 分、センターハウス前に集合し、各々観測機材の重たい荷物を積み込んだ。バスには夕食も積み込まれたが、ホテルの手違いで暖かい飲み物を準備してもらえず、変わりに冷たい飲み物や、チョコレートを沢山つけて貰ったらしい。バスに乗ってから、添乗員の須原さんが人数確認するが、数えても 27 名のところ 26 名しかいない。皆な何となく須原さんを信用していないようで、「もう一回数えてみたら〜」みたいな雰囲気。でもガイドの京子さんが数えても一名足りず、これは本当に誰か一名来ていないのだ、ということになった。送れてきたのは戸田さんという男性の方だったが、結局 17 時 38 分にまだ陽が沈んだばかりの観測地に向かって出発した。空の状態は、まずまずか。南オーストラリアの夕空に、遮るものがないためか簡単に金星と月齢 1 の月を見つけた。

地平線に沈みゆくひしゃけた月．雲にかくれているのは金星

ウーメラの夜　一日目

ホテルから 15 分ほどの観測地「ナランガー」というところは、アメリカの秘密基地があったところだそうだ。何か痕跡が有るのかと思ったが、よく考えてみればそんなものは残すはずも無く、何処までも続くかような原野だった。周りは 360 ° 地平線だ。舗装してある車道以外は、乾燥して荒れた土の所々にソルトブッシュが生えていて、歩きやすいとは言いがたい。その上、雨が降ったらしくグジュグジュの泥状態だった。

少しでも機材の設置をしやすい場所を探して、皆んな重たそうな荷物を抱えて周囲に散っていく。17 時 34 分に日没になって薄暗いが、真っ暗にならないうちに設置を終えたいところだ。リニア彗星が輝いているはずの西の空に向かって準備していた。渡辺会長と佐藤(智)の三脚を 10m ほど離して並べ、極軸合せを始める。彗星は一体どんな風に見えるのか想像すると緊張し、本当に南オーストラリアの夜空の下にいるのだと、実感が沸いてきた。

皆既日食の海外遠征の時は、皆既の瞬間とその前後が勝負の活動だが、今回は、夜間の長時間、しかも 3 日間の長丁場だ。皆既日食のときとはまた別の緊張感が有り、彗星はもちろん、どんな星がどんな姿を私たちに見せて感動させてくれるのかと思うと、何が起こるか分からない楽しさもある。渡辺会長は、作業を「よし！ OK だ！」といって終わらせ、既に金星と月の写真を撮っていた。金星の右少し上には火星と土星も見える。佐藤(智)は、なかなか極軸合わせの作業が進まず、四苦八苦していて、渡辺会長にも「なんだ？ まだ終わらないのか？ 俺、もう写真撮ってるゾ」と言われる始末。苦笑いしている姿は、いつもの事か？ でも、北半球の北極星のように大きな目立つ星は無く、はちぶんぎ座の中にある小さな星を頼りに極軸を合わせなければならないのだ。その作業を素早く済ませてしまうとは、渡辺会長はやはり心眼の持ち主だ。

空の状態は快晴ではなかった。雲が所々に浮いていて、少しずつ見えてきている星さえも、時折隠してしまっていた。しかし、日本では冬の星座のオリオン座やふたご座を南オーストラリアで見ているのは、贅沢な気分だった。星座と地平線との傾きがいつもとはまるっきり違うのだ。

月も金星も沈んでしまった 19 時近く、もうリニア彗星が見えていても良い時間になった。0 等台の明るさになっているはずで、どんな姿を見せるのか、探していてもドキドキする。しかし、渡辺会長のいう方向を見ても、なかなか肉眼では見つからない。どこか遠くで「見えたよ！」と喜ぶ声が聞こえ、俄然やる気が出る。双眼鏡で探すと、日本とは逆に横たわるオリオン座の少し南、見た感覚では左上あたりのおおいぬ座に何とか見つけた。だが、本当に 0 等級なのか、と思ってしまう明るさだった。肉眼でもはっきり見えるのではないかと思って、はるばる北海道から出て来たが、その段階では期待はずれだった。

そんな中、渡辺会長は着々と彗星の撮影を進めてい

リニア彗星(C/2002T7) 2004年5月21日 19時2分から (300mm F 2.8) 露出2分 フジファインピクス S2pro ISO 1600

ニート彗星(C/2001Q4) 2004年5月23日 19時27分から (300mm F 2.8) 露出2分 フジファインピクス S2pro ISO 1600

く。ニート彗星も北の空に見えるはずで、北の空、し座の頭の先の下辺りにボッとしたものを見つけたが、双眼鏡でやっと探せる程度の明るさだった。佐藤麻子が「見つけました」と言っても、渡辺会長に「本当にそうか？」と疑われる程だった。しかし、同じ空、同じ時に二つの彗星を見ることができるだけでも、なかなかあることではない。そして、今回のお楽しみは彗星だけではない。リニア彗星が 21 時過ぎに、ニート彗星が 22 時頃に沈んだ後も南天の星空を満喫できるのだ。しかも三晩、同じ所に観測・観望・撮影目的で泊まり、三日続けてオーストラリアの夜空を朝まで見つづけるなんて、一生のうちで最初で最後だろうと思う。

南十字星を拝めるだけでも、別世界に来たことを実感できる。何のご縁か南半球まで連れて来られた市川さんと阿部さんは、一つ一つの星の姿を脳裏に焼き付けているかのように、感動しつつ熱心に見続けていた。阿部さんは、渡辺会長の撮影の秒読みの手伝いもしていて、確実に撮影助手への道を歩き始めていた。

空には相変わらず雲が浮かんでいる。ようすをみてバスに夕食を摂りに行った。パンフレットには、三晩とも同じようなサンドイッチ類と書かれていたが、割とまともな食事だったので驚いた。日本でいう市販されているお弁当箱の中に、ポークソテー・温野菜(いも・人参・インゲン・カリフラワー・とうもろこし)が詰められていて、しかも保温器の中で温められていた。空気が冷たくなってきた夜には、とてもありがたい内容だった。デザートにはバナナやりんご・大量のキットカットが箱ごと置かれていた。誰かが食事をしに来るたびに、添乗員の須原さんは寒さ対策の防寒着のモコモコ姿で現れ、接待をしてくれた。彼は、何度も天文現象に関わるツアーで仕事をしながら、積極的に興味は持つことは無さそうで、いつも淡々としている。

バスのデッキ下の貨物室を開いて臨時の食堂とする

渡辺会長が撮影した一眼レフデジタルカメラの画像を見ても、「あー、すごいですねぇ」と冷静に感想を言っている。食事後、初めに設置した場所の地盤が悪いこともあり、舗装されている車道に移動した。空の状態が万全ではない中で、南十字星・ケンタウルス座を中心に撮影を続けた。

24 時、ホテルに帰る人の為にバスが出発する時間になった。一度帰ると、すぐにバスは観測場所に戻って来てしまうので、朝までホテルで過ごさなくてはならず、反対に、その便に乗らないと朝まで観測地で過ごさなくてはならない。雲も少々広がってきて、帰るか粘るか迷ったが、寒さも厳しくなってきたので、毛布を取りに一度女性 3 名で戻ることにした。更なる防寒グッズを抱えてバスに乗り込み、ホテル前から再出発し、観測場所に戻る途中にあるロードハウスに、ホットコーヒーを買いに寄った。ドアを開けると、大音量の音楽が鳴り響き、大勢の若者たちが喋り捲っていた。殆どが目の周りを赤くして、目つきをドロンとさせて酔っ払いながら騒いでいた。その中を「負けてたまるか」と突き進み、無事にホットコーヒーを手にすることができた。ウーメラの村に若者の存在を確認できて安心したが、きっと彼らは、防寒服でモコモコに着膨れした奇妙なアジア人のオジサンおばさんを発見して、「何処の山から下りてきたんだ〜」と思ったに違いない。

25 時過ぎに観測場所に戻り、暖かいコーヒーを皆なで飲んで少しホッとし、また撮影を開始した。しかし、空の機嫌が悪いようで全体に薄雲が掛かってきた。休養し、寒さもしのぐ為に、一時バスに非難した。身体を縮めて少し横になっているうちに眠り込んでしまったようで、あまりの寒さに目が何となく覚めた時は、もう既に夜は明けていた。渡辺会長と佐藤智秀は、美しい黄道光を見ることができたようで、自分が眠り込んでしまったのが悪いのだが、何とも羨ましかった。薄明の中、機材の撤収作業を開始し、残っていた人の人数確認をしていたが、バスの場所から随分遠くで観測していたグループがいて、渡辺会長が随分と探し回ってくれていた。若者のグループは、寒空の下寝袋の中で眠りこけていたらしく、「さすが、若いと違うな〜」と感心した。無事に皆な揃い、6 時 45 分、ホテルに朝帰りした。

これでウーメラ一日目の夜は終わった。曇り気味と

ガイド撮影に夢中になっている間，三脚に６×７魚眼を載せて放っておいた南天の日周運動

いうことで終夜観測とはいかず、スロースタート気味になったが、三日間続くことを考えると、丁度良い滑り出しに思えた。

東の空(写真左手)がほんのりと明るくなってきた頃の南天．天の川が西に傾き，みなみじゅうじが中央下でひっくり返っている

④ ５月２２日(土)

ウーメラにて

エルドホテルの朝

初めて迎えたエルドホテルの朝は、昼ちかい 11 時 30 分、渡辺会長の「ドンドンドン」とドアを叩く音で始まった。渡辺会長は、佐藤家に気を遣って下さったのか、3 人の共同生活をやめて自分の部屋に戻っていたのだった。佐藤麻子は、もう起きて洗濯をしたし身支度もしていたのだが、亭主智秀はベッドの上でゴロゴロしながら晴天は期待できない天気予報を間抜けな顔して見ていたので、「俺だ！起きろ。開けろ」と聞こえるドアを叩く音に、思わず飛び起きていた。ドアを開けると、疲れ目をしてゲボ髪の茄子のヘタ状態になった頭をした渡辺会長が、仁王立ちしていた。朝の挨拶もそこそこに、機材用の電池の充電をし、今後の計画を話した。予想に反して彗星が暗いので、今後の撮影対象は南天の星に絞ろうということになった。

部屋の中の洗濯物は乾燥しているので乾きが早い

お昼過ぎに、市川さんがアボカドを、阿部さんがティムタムというチョコレート菓子を差し入れてくれた。お二人は食事を済ませたと言うことだったので、私たちも買っておいたパン・ハム・チーズ・ジャム・コーヒーなどで済ませた。ハムもチーズもなかなか美味しかった。デザートにリンゴやオレンジも食べ、野菜を食べたいと思いながらも胃袋は充分満足した。その後、渡辺会長は、シャワーを浴びに部屋に戻っていった。

午後からの予定はウーメラの観測施設見学だ。今回のツアーには観光が殆ど無いので、少しでも旅行気分を味わう為には、何が何でも参加しなくてはならない。睡眠時間は 3 時間くらいだったが、ボーっとしている余裕は無い。13 時 45 分の集合時間に間に合うよう、急いで準備をした。エルドホテルで迎えた朝は、結構忙しかった。

ウーメラ見学

13 時 50 分にバスでホテルを出発し、5 分も経たないうちに「ヘリテイジ・センター」に着いた。こじんまりした村の歴史資料館、といったような所だ。観測所の先生が待っているという電話が急にあって、後ほど見学することになったようで、建物に入って 5 分ほどでバスに戻った。

バスに乗って 20 分程大平原を走り、“ カンガルー望遠鏡 ” のある砂漠地帯へ到着した。村の中心を出てしまってからは、周りに何も無くなり、その施設の周りも、見渡す限り地平線だった。それでも柵で囲まれゲートで入出を管理しているので、誰か関係者が引率しなければ入場ができない。誰が見学で訪ねてくることも無い遠い辺境の地ゆえ、大学の先生自ら解説をかってでてくれたらしい。

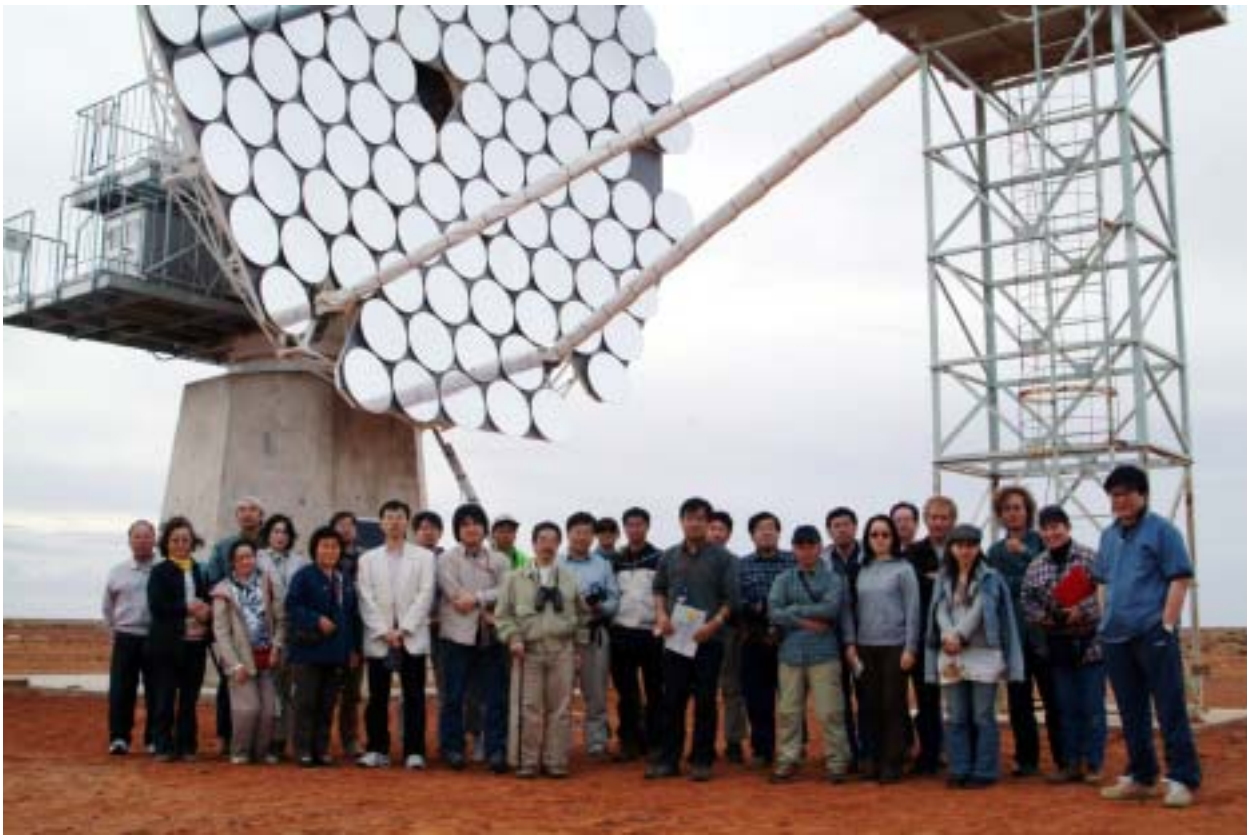
カンガルー望遠鏡は、東大宇宙線研究所が中心となり、日豪協力で超強力な電磁波であるガンマ線天体の謎を研究しようとする施設だ。Collaboration between Australia and Nippon for a GAmma Ray Observatory in the Outback の頭文字をもじって “ CANGAROO ” というらしい。最も短い波長であるガンマ線が大気に入ってきて、粒子のシャワーを起こす時に発せられるチェレンコフ光という青い光のフラッシュを大口径の光学反射望遠鏡でとらえ、地上で実験不可能な中性子星や超新星、活動銀河核といった極限状態の現象を観測・研究するのが目的の施設ということだった。

解説してくれた谷森先生と記念写真

広大な敷地の中に、4 基の 10m 望遠鏡とプレハブ小屋みたいな研修室が立っている以外は何も無く、手弁当でやっているような研究所だった。その広大な敷地は、オーストラリアから年に 1 ドルで借りているとの説明だったが、書類の手続き上必要最小限の金額なのだろう。でも、そんな地平線しか見えない広い敷地の中では、寂しいと思う時は無いのだろうか。研究に没頭していると、そんな事を感じないのだろうか。凡人には分からない世界だ。

研究者の京都大学教授谷森達先生が解説してくれたのだが、とても話し好きで熱心に語ってくれた。きっと分かりやすく解説してくれたのだと思うが、理解できる部分と理解できない部分が混ざり合い、凡人の佐藤麻子は脳の中に知識としてとどめておくことは結局できなかった。曇っていて冷たい風が吹く中話を聞きながらも、「渡辺会長は半そでを着ていて寒くないのだろうか？」とか、乾いている土を見ながら皆なの足元を観察し、「どうして天文オタクの方はパンツの裾がくるぶしまで短い人が多いのだろう、でも渡辺会長は奥様の美香さんのお陰で長めで合格」とか、「寒く、乾燥しているのにどうしてハエが多いのだろう」等となど、くだらないことを考えていた。カンガルー望遠鏡について正しく詳しく知りたい方は、ホームページを検索して、ご参照ください。

カンガルー望遠鏡の解説を一時間ほど聞き、ヘリテ



８０ｃｍの鏡が１１４枚，口径１０ｍの放物面鏡となる最新カンガルーII望遠鏡の前で記念写真におさまる

どういう観測をしているのか熱心に説明する谷森先生

イジセンターへ戻った。ウーメラの歴史を、展示物とビデオで学ぶことができる。１階フロアには 6 レーンのボウリング場が併設されていて、村のちょっとした娯楽施設も兼ねているようだ。

ビジターセンターのビデオでウーメラの成り立ちを学習する

焦点距離8m，視野4°,光電子増倍管552本

ウーメラは、1947 年、ロケットとミサイルの開発と打ち上げの目的の為に、イギリスとオーストラリアが建設した村だ。1960 年代には多くのロケットが打ち上げられ、ロシア・アメリカに次いで衛星の打ち上げにも成功したところなのだ。日本では殆ど知られていない所だが、ロケットの打ち上げに散々失敗している何処かの国よりも、先をいっていたのかも知れない。特殊な開発・研究の為、村に出入りする人のセキュリティーチェックがとても厳重だったそうだが、最盛期は人口が 7,000 人近くになった。今では人口 200 人程の村になり、静かなたたずまいになっている。

センターも、片言の日本語を話す一人っきりの女性で１フロアを切り盛りしている。ショップの商品に埃が被っているところをみると、日本からきた私たちが久し振りの団体客だったようで大忙しだ。どうして日

今見てきた望遠鏡の復習をしている佐藤智秀

本語が？という質問に「何年か前、外国語教師として派遣されたことがある」と言っていた。

ウーメラの夜　二日目

空一面曇り空の中、16 時 30 分にホテルに戻った。夜間に晴れる見込みは殆ど無く観測は諦める人が多かったのだが、何名かの人のどうしても観測したいとの希望があり、そのためにバスを出してもらうことになった。それが旅行の目的だから一人のリクエストにもこたえなくてはならない。インストラクターの渡辺会長も同行しなければならず、辛い立場だった。

そして 17 時、渡辺会長は旅と前日の疲れからお休みしたいところ、頑固な(？)希望者の為に中年の身体に鞭打って観測地に向かった。日頃お世話になっておいて付き合わなかった佐藤智秀・麻子は冷酷人間だろうか？ 夕食の時間まで少しのんびりしようと部屋に戻ったが、佐藤麻子は大変なことに気がついた。旅行中の持ち物で何よりも大切な紀行文用のメモ帳を、ヘリテイジセンターの何処かに忘れてきたのだ。今までのメモが無駄になる、紀行文が書けなくなる！ 自分にとっては一大事だった。今年の出来事の中で一番焦り、脂汗が出るほどだった。赤い表紙のメモ帳は、中にはミミズのような字が這いずり回り本人にしか解読できない代物で、相当な物好きでない限り誰かが持っていくはずも無く、とにかくヘリテイジセンターに戻ることにした。裏道を探し、歩いても 10 分程度だった。予想通り、ウーメラの歴史のビデオを見ていた時に着いたテーブルで見つけた。ホッと胸を撫で下ろし、焦って熱くなっていた頭が、スーッと冷めてきた。

地元住民の余興を観戦し，つかの間のふれあいを楽しむ

帰りは、また別の近道を通ったが、途中で「 Woomera Bowling Club 」という看板と芝生が見え、覗いて見るとラフな格好をした紳士が 4 人、ラグビーボールより少し小さめの黒いボールを転がし、陣地取りのようなゲームに興じていた。オーナーらしき人が「どうぞ、入って。何か飲まないかい」と誘ってくれた。オーストラリア、オリジナルのゲームなのか聞いてみると、イギリス発祥との答えが返ってきた。見たところ、芝生上のカーリングのようなスポーツだった。お言葉に甘えて店内に入り、イケメンの若者 2 人が先客で座っているバーカウンターでビールを一杯のみ、ほろ酔い気分でホテルに戻った。

今買わなければ，お土産の売店はここにしかない

ホテル残留組の夕食はセンターハウス内で、18 時 30 分からだった。私たちは団体用の大広間のような所に通されたが、レストランやバーは、泊り客なのか住民がウィークエンドの夕食を楽しんでいるのか、予想以上に賑わっていた。食事はチキンソテーや野菜・ライスだったが、観測地に持っていくはずのお弁当の中身が一枚のお皿にテンコ盛りになっていて、お弁当パックのまま、暗い外で「寒い寒い」と言いながら食べた方が美味しいだろうと思った。お湯のようなコーヒーで食事を締めて、部屋に戻った。市川さんはお休みになるとのことで、佐藤家の部屋に阿部さんを誘い、ポートオーガスタで仕入れたワインを飲みながら、渡辺会長の帰りを待つことにした。

2002年皆既日食の時に売れ残った記念キャップを土産に買い占める阿部さん

21 時過ぎ、無事に渡辺会長が帰還した。晴れる見込みが全く無く、観測に行ったメンバーの 100 %の意見でホテルに戻ることに決定したらしい。渡辺会長は、「もう、最初から行きたいなんて言ってくれるなよな～」と、疲れきった表情で椅子になだれ込んだ。その後、私たちと話したそうに向かいの部屋から廊下に出てきた中谷さんを部屋に誘い、ならば他の仲間もと太り気味の黒川さん・細めの山田さんの 3 人を招き入れ、ウーメラの夜の宴会が始まった。

渡辺会長の「来るなら礼儀としてビール持って来いよ

～」の一声で、黒川さんがポートオーガスタのリカーで買い込んだ缶ビールを沢山差し入れしてくれたり、他の 2 人もおつまみなどを持参してきた。ビール・ワイン・おつまみがそろえば話しも進む。普段、呑まない渡辺会長が人が差し入れてくれたタダのためか、クイクイッとビールを飲み干している。そうでもしなきゃ、彼らの話に耳を傾けるわけもないか…。

２日目は天気が悪く，早いうちに帰還した．かえって休養がとれて３夜目が充実することになった．雑談ではながさく．

中谷さんはスローでテンポも雰囲気も独特でおもしろい、何だかかまいたくなる、イジクリたくなるような雰囲気の人だった。南極で観測できる皆既日食の時、飛行機から現象を見られるというのでその参加料を 30 万円も出して買ったのだが、いざ搭乗してみると、太陽とは真逆に位置する座席だったらしい。30 万円も出して、現象も見られないなんて…と、中谷さん自身の話し方の面白さも相まって、皆なで大受けして笑わせてもらった。

黒川さんはどうやら酒太りのようで、完璧にビールっ腹。写真を仕事としているらしいが、またの名を「保険荒らし」と自分で名乗っていた。というのも、旅行の際、故意に自分のカメラを破損させたりし、対物保険で新しいカメラを買うという保険の有効利用をしていることを、自ら白状していた。カメラが商売道具の人がカメラをもてあそぶ行為には、どうも賛成できなかった(こんなこと、活字にして良いのでしょうか？)。

山田さんは無表情だが真面目で優しそうな人だった。その無表情ゆえ、渡辺会長に「なんか怒ってんのか？」と言われ、「いえ、こういう人なんです」とうつむき加減に訴えていた。いつも怒っているいると勘違いされるらしい。神経質そうに見えるところもあり、「食べても太らないのか？」とか「考えすぎて結婚できないんじゃないのか？」などと、勝手なことを言われていた。でも彼は、トランクなどの写真関連荷物のほかに、望遠双眼鏡の機材が入った 25kg もあるカメラバッグを日本から抱えてきていて、その時まさに椅子にして腰掛けていた。明晩晴れた折には、皆んなに大型双眼鏡で彗星を覗かせてくれるらしい…と、勝手に決められていて、そんな山田さんは優しい人に違いない。

22 時過ぎに阿部さんはおねむさんから途中退場したが、天文好きの方はおしゃべりも大好きなようで、渡辺会長に引けを取らずにしゃべりつづけていた。部屋の隅っこには空のビール缶が 20 個ほど転がっていた。

気が付くと日付が変わってから解散し、ベッドに入ったのは 24 時 30 分を回った頃だった。こうしてウーメラ二日目の夜は終わった。明日はウーメラ最後の夜。必ず晴れることを祈って眠りについた。

★ ここでワンポイント

カンガルー望遠鏡って何？

新月の夜，オーストラリアの荒野を車でゆっくり走る。一般の立ち入りが禁止されたこのあたりは，カンガルーたちの天下だ。夜行性の彼らとひょっこり出会うこともある。途中でライトを消し，さらにしばらく進むと，星明かりの中，天を向いた大きなおわん型アンテナの黒々としたシルエットが浮かび上がる。

アンテナの口径は 10m。表面には直径 80cm の鏡がすき間なく敷き詰められ，南天の美しい星々を映し出している。しかし，アンテナがとらえるのは，そうした輝く星ではない。暗い夜空のあちこちで，ほんの一瞬輝いては消えるかすかな一条の青白い光だ。

そのもとは宇宙の彼方からやって来るガンマ線。X 線より波長が短く，エネルギーが非常に高い電磁波だ。宇宙にはガンマ線で明るく輝く天体が，知られているだけで 300 個弱ある。そうした天体からのガンマ線が大気にぶつかると，高エネルギーの電子と陽電子のペアを生み出し，それがさらに雪崩のようにたくさんのペアを作って，地表に向かって超高速で突っ走る。その際，各粒子はチェレンコフ光という淡い青白い光を，自動車のヘッドライトのように進行方向に向けて放つ。

人間の目には見えないが，毎夜，天からはチェレンコフ光が雨のように降り注いでいる。この光のシャワーを手がかりにガンマ線天体の謎を解き明かそうと，日米欧が大規模なガンマ線望遠鏡の建設を進めている。

その 1 つがここ，ウーメラというオーストラリア内陸の荒野にある。東京大学宇宙線研究所を中心に約 20 研究機関が参加する日豪協力のガンマ線望遠鏡で「カンガルー（CANGAROO）」という。

● ガンマ線天文学の夜明け

天文学の研究対象は長い間，可視光で見える天体に限られてきた。しかし 20 世紀半ば，レーダー技術の発展を背景に電波天文学が誕生し，宇宙背景放射やクエーサーが発見された。さらに人工衛星によって，地上では観測が難しい X 線や赤外線を宇宙空間でとらえられるようになり，これらの目に見えない波長域で輝く星や銀河が続々と見つかった。

こうした中，核実験を監視する米国の軍事衛星が，宇宙で起こるガンマ線の爆発現象「ガンマ線バースト」をとらえた。1967 年のことで，これがガンマ線天文学の始まりだ。X 線と同様，ガンマ線は大気で遮られるため，天文衛星を使う観測が中心となった。しかしそれでも検出は難しく，最初のうちは 20 個程度のガンマ線天体しか見つからなかった。

状況が大きく変わったのは，1991 年に米国のコンプトン衛星が活動を始めてからだ。コンプトンには総重量約 2 トンに達する超大型のガンマ線検出器などが搭載された。これによって一挙に約 270 個のガンマ線天体が見つかり，ガンマ線が描き出す宇宙の全体像が浮かび上がった。

天の川はガンマ線で見ても明るい帯のように見える。その中で「かに星雲」など，いくつもの天体がとりわけまばゆい輝きを放っている。天の川から離れた場所には，ガンマ線で光るはるか遠くの銀河がポツポツと

見える。こうした宇宙の風景の中で，目がくらむようなガンマ線バーストが毎日数回，空のどこかで発生しては，0.1 秒から数分で消えている。

これまでに見つかったガンマ線天体の約半数は，電波や可視光など他の波長では見えず，正体がつかめていない。宇宙最大の爆発現象といわれるガンマ線バーストについても，最近はかなり研究が進んだものの，そのエネルギー源など多くの謎が残っている。

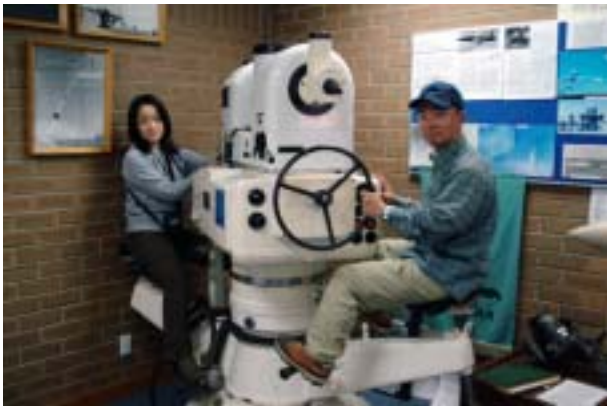
天文衛星にしても，すべてのガンマ線を観測できるわけではない。エネルギー換算で約 100GeV（1GeV は 10 億電子ボルト）以上の非常に波長が短い超高エネルギーガンマ線を観測するには非常に大きな検出器が必要で，衛星には載せられないからだ。しかも，ガンマ線天文観測の大黒柱だったコンプトン衛星が昨年，大気圏に突入して消滅した。現在，軌道上でガンマ線天体を定常観測している大型衛星は 1 つもなくなってしまった。

● 夜空に降る光の雨

こうした状況を背景に，ガンマ線望遠鏡の開発が盛んになってきた。大気のチェレンコフ光をとらえれば，超高エネルギーのガンマ線天体を観測できるからだ。

現在，日豪協力のカンガルー望遠鏡のほか，この分野の草分け的な存在である米国スミソニアン天文台のホイップル望遠鏡がアリゾナ州のホプキンス山頂（標高 2320m）で，ドイツの望遠鏡が大西洋のカナリア諸島で，晴れた夜空に降る光の雨を見つめている。中でもカンガルーは最新鋭で，南天の観測を独占している。

日経サイエンスから引用



ヘリテイジセンターの入り口に展示してあった人工衛星追跡トラッカー(乗ってはいけないと書いてあった)

⑤ ５月２３日(日)

ウーメラ滞在最後の一日

のんびりした朝

昨夜はずっと天気予報ばかりやっているＴＶがあったので、天気ばかり気にしていた。どうも豪大陸中央を前線が横切っているようで、じきにウーメラの辺りを横切り通過しそうな雰囲気だった。

朝起きると窓から陽が差していて、今夜の天気は期待が持てそうだった。前日は観測に行かずに宴を楽しみ、睡眠時間も多く取ることができたので、“ オリンピックダム鉱山 ” 見学ツアーの集合時間の 11 時 30 分まで、午前中の時間に少し余裕がある。8 時 40 分に渡辺会長が「ドンドンドン」と前日と同じようにドアを叩いてやってきて、不具合が見つかった明視野照明コントローラーの配線の応急処置を佐藤智秀としていた。佐藤麻子は、終夜観測をして明日が朝帰りになると出発まで間が無いので、ある程度の荷造りが必要と思い干しておいた洗濯物を片付けたり、夜使うものや必要の無いものを分けたりして準備をした。その時、観測時に使うペンライトの赤くしてある先端部分の部品がもろに外れて無くなっていて使い物にならなくなっていたのに気づいた。きっと昨晩の暗闇の中、どこかに落としてしまったのだ。もう一つのマグライトのレンズ部分に赤いセロハン状のものを付けることにした。

ウーメラのスーパーマーケットには何でもあった

ブランチ用のたんぱく質と野菜、赤セロハンの替わりになるようなものを探しに、ホテルから歩いて 10 分位の所にある、ショッピングセンターに出かけた。その店の事前情報では、品物の種類も数も少なく欲しいものは手に入らない可能性があるとのことだった。期待しないで外からは倉庫にしか見えない店に入ると、広い店内に日用品から食品から文房具から葉書から…と、ありとあらゆる物が置いてあった。ウーメラ村の唯一の大きなお店なので、村民の生活の為には当たり前か。これなら何か赤い透明な物が見つかりそうだった。お菓子類のパッケージなどに赤い色が有ったが、どぎつい色で光がうまく透けそうになかった。店内を巡るうち、ゴム手袋のパッケージ袋に丁度良さそうな赤い色を見つけた。これで安心して夜を迎えられる。渡辺会長「アイス食いたい」の一言でアイスバーを買い食べながら歩いて行った。

途中、ヘリテイジセンターに寄った。前日渡辺会長がそこのショップで買ったキャップが、なかなか良かったので、お土産にもっと買っておこうとなったのだ。2002 年の皆既日食の時に作ったもののようで「ECLIPSE WOOMERA　2002」と刺繍が施されていて、生地もなかなかしっかりしている．それが売れ残ったためなのか、たったの 5 ドルとは思えないのだ。市川さんと阿部さんも着ていて、お土産を物色中だった。ウーメラには他にお土産屋は無いので、そこで買わなければ、滞在地独自のものは手に入らないのだ。そこで佐藤麻子は村の名入りのソーイングセットを、阿部さんはキャップを買い占めた。小さな店が今年一番の賑わいで、店のめぼしい物も無くなってしまったのではないだろうか。ホテルへ戻る途中にロケットやミサイルの模型の展示があり、その前で記念撮影をしながらのんびり帰った。

街路の一角に古い航空機やロケットの展示公園があった

部屋に戻ると 10 時 50 分。鉱山見学の集合時間は 11 時 30 分だ。急いでマグライトのレンズ部分にゴム手袋のパッケージの赤いところを切り取ってはさみ、赤い光のマグライトを完成させ、買ってきた野菜やハムをパンに挟んで食べ､食事を済ませた。

オリンピックダム鉱山

現在の**オリンピックダム鉱山はウラン鉱石から原発用核燃料のウランを採取している．金や銀，銅といった副産物もたくさんとれる**

ウーメラから北へ約 80km に位置するロキシビー･ダウンという街にある「オリンピックダム鉱山」へ、B97 号線で向かった。金・銀・銅やウラニウム鉱山として、世界的にも有名なところだという。私はその鉱山のことは全く知らなかった。そういうものがあるとはこのツアーで初めて知ったくらいだ。ウーメラはあの有名なエアーズロックのある“アリススプリング”までのびる国道 87 号線から外れ、北西に 2km ほど入った位置にある。そのまま大平原の中を走っていったが、見渡す限り何も無くて退屈したのか、添乗員の須原さんは首が痛くなりそうな格好で完璧に眠っていた。しかも手元から書類をドサッと落として床にばら撒いていた。

鉱山の町に近づくと、地面が鉱物の成分の為と思われる赤黒土になった。“ロキシビー・ダウン”という街の人口は 4,500 人、その内 15 歳以下が 4 分の 1 も占めている若者の多い街だ。すり鉢状になっているオリンピックダムという元となった場所は、元々羊に水を与える為に作られた井戸のようなものだった。底は粘土状になっていて、水がすぐになくならないように工夫されているらしい。1971 年に銅を発見してから掘りつづけているが、これから 60 年も掘ると銅が無くなると言われていたところ、採掘できるほかの物質が発見され、その物質は 200 年は掘り続けることができ、街が潤うということだ。

鉱石を小さくする粉砕機ミルと解説の女性

広大な敷地の中に、採掘後の精錬の為の工場群が立ち並んでいた。敷地の中の移動の為に TOYOTA の 4WD 車が使われていたが、すぐに錆びてしまうために車は 3 年しかもたないという説明があった。採掘現場は地上の入り口から地下へらせん状に道路が続いていて、その道は全長 260Km も続いているという。深さで言うと地下 860m にもなるそうだ。坑内を見学できると良かったのだが、運搬車両の出入り口となる坑口を見ただけで、あとは地上施設の見学のみとなった。てっきり露天掘りでクレーターのようにポッカリ空いた作業現場を外の崖上から目の当たりにできると思い込んでいたので、ただ坑口の穴を見せられた時は唖然とした。それには「オプションの金返せ！」と誰もが思ったに違いない。他は、被爆などの安全上の問題で全てバスの中からの見学だったので、より残念だった。

熔けた1枚200kgの金属板をズラリと並べて冷やしている

地下には大空間がひろがり大型のショベルカーやダンプが走り回り、採掘された鉱石は大きな櫓が組まれたエレーベータで地上まで上げられ、ベルトコンベアーで精錬所の周囲にズリ山のごとく積み上げられている。巨大な回転するドラム管のようなミルで小石状に粉砕され溶鉱炉に投入される。まずはいろいろな不純物がまざっているものを除去しウランを抽出する。当然イオウなどがまっ黄色な山に積み上げられていた。金・銀・銅の混ざった 1 枚 200kg の板を作成し、順次、純度の高い銅、銀、金が分離される。誰かが「最終的に残った、金はどこにしまってあるんですかね?」という質問に、「答えられません」と言われていた。

敷地内を一巡した後、センターハウスのレクチャールームで 6 年前に作製された、オリンピックダム鉱山の歴史ビデオを見させられた。「何か質問は？」といわれても鉱物についてはよく分からないので、質問もできない。すると関西から参加していたおじさんが、「ビデオなんぞはいいから、見学者のおみやげに金貨の 1 枚もおみやげにくれへんか？」と質問した。解説の女性は、「そんなに気前のいい会社だったら、私はもうとっくにお金をためて辞めています…」と答えた。少し恥ずかしくなってそそくさと部屋を出た。

なにげない写真でもツアーでは撮るのが難しい

14 時 20 分に鉱山を出発し、ひたすら来た道を戻って行った。何もないただただ広い大平原。何を考えたのか「カンガルーの標識と一緒に写真を撮りたい」という声があがり、バスを停めることになった。何のことは無い、北海道で言えば「動物注意」「鹿注意」といった標識なのだ。オーストラリアらしい動物に出会っていないので、標識とだけでも記念撮影したかったのだろう。その後もわがままを言って、真っ直ぐな道のところで停まってもらった。何処までも続く真っ直ぐな道、青い空、地平線など、シチュエーションは揃っていて美しい写真を撮る事ができた。

空は青く美しく広がってきていた。どんどん回復傾向だ。ウーメラ最後の夜、彗星が、満天の星たちがどんな姿を見せ、感動を与えてくれるのか楽しみだった。

ウーメラの夜　三日目

ホテルに戻り、観測の準備を開始。泣いても笑っても、ウーメラでの最後の夜だった。一日目は何がなんだか初めてみる南天の素晴らしさに我を忘れて星を見るのに終始し、余裕がなかった。今夜はその教訓を踏まえてガッチリと無駄のない撮影をしようと話し合った。撮影機材などの忘れ物が無いか、何度もチェックした。一晩目の寒さを参考に予備の毛布も持っていく

「カンガルーの飛び出し注意」の看板前で集合写真．この看板がなければオーストラリという雰囲気がしない

ことにした。

16 時 30 分にホテルを出発した。まだ明るいうちの出発だ。空は快晴だった。その日は初めから安定感のある舗装道路の上にセッティングをした。夕焼けが美しかった。皆んな、その夕焼けの美しい赤色を正面に浴びながら準備をし、夕空の２大彗星の２日間の変貌ぶりにも期待した。

道路の上に機材をセット．この道に車がくることはない

快晴の夜空を想像すると気持ちがまた高揚してくる。阿部さんは絵画も趣味の一つのようで、背景を夕焼けにし、皆んなで機材を組みたてているようすをスケッチしていた。久しぶりに見る細い月の地球照も美しく、渡辺会長は早速、月と沈んでいく金星の撮影を開始していた。その後も西の空のリニア彗星と沈むオリオン座、ニート彗星…と、着々と撮影を遂行。アシスタン

３日目になって金星(左下)から月が随分と高くなった

トの阿部さんは、「 10 秒前 9･8･7 …」と声を出してタイムキーパーの役目にも慣れてきたようだ。市川さんは、昨晩部屋で一緒に宴会をした山田さんの双眼望遠鏡で、彗星を見せて貰っていた。小さな双眼鏡で観るのとはまた違った感動があったことだろう。一方、佐藤智秀は、今日はモタモタしている訳にはいかず、渡辺会長に極軸合わせを手伝って頂き、ようやく撮影を始めることができたようだ。これで、出発直前に購入した一眼レフデジタルカメラ FinePix の出番が、ようやくやってきた。

気がつくと周りの人の姿が見えないほど暗くなり、見上げると満天の星空が広がっていた。360 度、星の世界で、自分を回転させないと全天が見えない。「うわぁ～凄いなぁ～きれいだな～」としか声が出ない。まさにその南天の星たちに囲まれていた。それは全て自分の物で、腕を伸ばすと一つくらい手のひらでキラリと光ってくれそうに思えてしまう。そして、南半球でしか見ることが出来ない天体ショーが、更に気持ちを盛り上げてくれる。西の空から東の空へと渡っている天の川が今まで体験したことの無い世界を広げてくれ、淡

初心者に彗星の位置を説明する渡辺インストラクター

く白く輝いていた。その中にある南十字座、その左脇下に位置する暗黒星雲「コールサック(石炭袋)」。初めて見る物だったので、すぐにはピント来なかったが、渡辺会長の解説を聞いてからもう一度見てみると、天の川の中に夜空のどの部分よりも真っ黒くスッポリと抜けているように見える所があり、それがコールサックだった。南天の天の川に浮かぶ、美しい黒だった。球状星団であるオメガ星団も、渡辺会長の道案内のもと双眼鏡で捕らえることができた。未知の南天の世界が夜空一杯に広がっていたのだ。

そして何と言っても大マゼラン・小マゼラン星雲だ。南の空、りゅうこつ座の 1 等星カノープスから南に向かって大マゼラン星雲・小マゼラン星雲と、並んでいる。渡辺会長の「うわっ、すげぇぞ、はっきり見えるわ～！!すげぇ！」との声に、「どこどこ？」と探すと、心眼を持たない凡人にでもすぐに見つけられるほどハッキリと確認できた。小マゼランは大マゼランの半分位の大きさだったが、どちらとも明るく、ボーっと夜空に浮かんでみえた。これは逃す訳にはいかないと、人を

敷物にドッカリ座り込んで南天の夜空を楽しむ

絶好の天気に恵まれ最後の夜に期待が寄せられる．夕日を見ながら自然に集まって記念写真を撮った

南極方向を魚眼レンズで写す．大・小マゼラン星雲が流れ雲の切れ端のようにポッカリ浮かぶ

みなみじゅうじ星が天頂に正中する時間を見計らって集中的に記念写真を撮影する．デジカメならではの２分という短露光．その間，人間は動かずじっとしていなければならないが一生残る思い出の写真になったことは間違いない．

さそり座のアンタレスからへびつかい座に延びる暗黒帯は北海道では高度が低くなかなか写せない

北海道(日本)からは見えない雲のように流れている，ケンタウルスα・β星やみなみじゅうじ座とコールサック(暗黒帯)．

頭上で明るいω星団を３００mm望遠でアップ

入れての記念撮影会となった。近くで観測していた人やガイドの京子さんや運転手のダレンさんも加わり、天の川・南十字座・大小マゼラン星雲をバックに、何とも贅沢な写真になった。佐藤麻子は、後ろに並んでいたおじさんがつま先で立っているのか体重をかけてきて、息づかいは聞こえるし重たくて露出時間 3 分を動かず耐えるのが大変で、「ちょっとー、自分の力で立ってよね～！もう！」と思いながら、にこやかに写真に納まっていた。そして、佐藤智秀・麻子は 2 人きりで大小マゼラン星雲をバックに撮影して頂いたが、その画像をチェックした渡辺会長は、あまりの美しさに「くっそ～！いい写真だ。くやいしなぁ～」と叫び、その場に奥様の美香さんと 2 人で撮影できない残念さが、体全体からあふれ出ていた。きっと、美香さんと 2 人で南半球に戻ってくるのは、そう遠くない将来だろうと思った。

来年の年賀状用の１枚だ

南天の空のあまりの美しさに、食事をする余裕は無かったが、6×7 cm のカメラを固定で投げっぱなしで撮影している間に、夕食が準備されているバスのデッキ下のテーブルに向かった。お湯が沸かされており、暖かいスープやコーヒーがとても有り難かった。添乗員の須原さんはその支度が役割と分かっていてお客さんにサービスしている．こういうスタッフやバスが用意されるところがツアーのいいところも知れない．メニューはご飯・牛ステーキ・マッシュポテト・いんげん・人参・コーン・カリフラワー・フルーツと甘～いケーキ。美しい星に感動しているので、暖かい食事が余計に美味しく感じた。

双眼鏡で観望中．北の空で地平線に逆に立つ織り姫と彦星．わずかな光害がウーメラの街の灯りだ．そばを誰かが懐中電灯を点けたまま通り過ぎたらしい．

南天の星をバックに、人を入れてのムービー撮影も行った。最初は人が動かずに撮ったが、やはりムービーは動きがないと面白さがない、ということで腕を上げ星を指したりするゆっくりした動きで画面の中に入った。これもまた、思い出の１シーンになった。その後もムービーでは、2 時間ほど 5 分おきに 15 ～ 20 秒ずつ、変わりゆく南天の星空を撮影した。そして 24 時、南十字座や大小マゼラン星雲が右に少し傾き、さそり座が天頂近くに上る頃に。ホテルに帰る第一陣のバスが、市川さん・阿部さんを乗せて出発した。明日帰国だから無理せず睡眠をとることになった。お 2 人も、南半球のど田舎まで連れて来られたが、今日の南天の美しい星たちに出会い、感動し、満足してくれたのではないだろうか。

日付が変わってから、天の川が天頂に掛かり始め、大小マゼランや南十字座が随分と傾き、さそり座の尻尾が下に向いた。空気の冷たさも増してきたようで、暖かいコーヒーを飲みながら撮影を続けた。考えてみると夕方からずっと立ちっぱなしで足が棒のようになっていて、佐藤麻子は、敷いたマットの上に毛布に包まって横になった。まるで自分が地球をおんぶしているようで、視界全てが、溜息が出るほど美しく輝く星だった。南天の星たちに酔っているうちに心地よい眠りに就き、2 時間程夢の中にいた。その後交代で渡辺会長も、佐藤麻子が温めておいた毛布にくるまった。そして、横になるなり「気持ちいい～！超、気持ちいい！」と雄叫びをあげていた。そう、ここ、南天の星空の下

で、アテネ以前に北島康介の名文句が既に誕生していたのだ！

そろそろ夜明けが近づいた。南十字座も殆どさかさまになり、南の地平線近くに降りてきている。徐々に東の空が明るくなり始め、見えている星の数が減り、南天の天体ショーの幕が下りだした。明け方、薄明が始まる以前から東の空に不思議な光が見えていた。これが黄道光だった。黄道光は、公害が無く地平線沿いが開けていてる所でなくては見ることが出来ない。白くも無く赤くも無く黄色くも無い淡く美しい舌状の光芒が、地平線から天頂付近まで延びていた。

東の地平線からクッキリと延びた“黄道光”

こうして、明け方まで楽しませてくれた南半球の夜空は、私たちを魅了し、未知の世界に引き込んで消えていった。この地に来るまで夜空くらいで、はっきり言ってこんなにも感動するとは思っていなかった。しかし、その美しい未知の世界に巡り合った。今生きていること、人との出会い、自然に感動することが出来ることなど、今の自分の周りの全て、そして南天の星たちに感謝でいっぱいだ。

⑥５月２４(月)

帰国の途へ

ビッグステーキ

観測地からあさの 7 時にホテルに戻ってからの 1 時間は、すさまじい時間だった。8 時過ぎにはホテルを出発しなければならず、眉毛を吊り上げながら狂ったような鬼の顔をして荷造りをした。1 分 1 秒でも無駄な動きはできず、ほぼ無言で作業を進めた。最後にトランクベルトを締めた時、「これでもう旅は終わりか…」と思い、少し寂しくなった。でも、感傷に浸っている場合ではない。センターハウス前で待っているバスに急いで向かった。

部屋に広げた機材をまた少しづつ収納してゆく

8 時 20 分にウーメラ「エルドホテル」を後にし、村を出てしまうと、また地平線を望むことができる景色が広がる。何もない。ほとんどの人が徹夜で仮眠を取ることも無く観測したため、睡魔に襲われ始め、車内シーンと静かだった。ガイドの京子さんも気を遣ってか、殆どしゃべらなかった。一度ガソリンスタンドで休憩して渡辺会長は 3 ドルのアイスを「これ 300 円だぜ！やってられるかよ、高けぇ！」と言いながらも美味しそうに食べていた。

その後、更に 87 号線を南に下って行き、ポートオーガスタを過ぎ、1 号線を走ってポートピリーに着いたのは 11 時 45 分、「ファミリー・シーフード＆グリル」というレストランで昼食となった。街のメイン通りの一角にある、こじんまりとしたレストランだ。メニューは前菜にエビのカクテルか春巻き、メインにチキンかビーフかフィッシュ、飲み物は各自で直接注文した。前菜の春巻きがなかなか美味しかったが、メインの料理、ビーフステーキが出てくると、「ひぇ～！」と驚きの声が店内にこだました。大きな皿からはみ出すほどのジャンボサイズの肉が横たわっていたのだ。チキンやフィッシュフライも小さくはなかったのだが、日本人にとっては笑ってしまうほどの大きさで「こんなの食べられないよ」と、皆んなステーキを眺めるばかり。味は決して悪くは無かったのだが、ステーキを注文した人の殆どは、見るだけでお腹一杯…という顔をしていた。

久しぶりのレストランでの料理だった

だ　シェフの女性が店内に出てきてくれると、皆んなから盛大な拍手が沸き起こり、彼女は「なになに？ 何でこんなに盛り上がる訳？ 日本人って変！」という表情をしていた。ステーキの大きさでこんなに盛り上っていたので、添乗員の須原さんも顔から緊張の色が抜け、ホッとした表情で純粋に食事を楽しんでいるようだ。昨夜は晴天のなか美しい南天の星空を堪能でき、「今回の俺の一番の仕事が無事に終わったぜ…」といった感じだ。もしも、昨夜が曇っていたりすれば、ステーキの大きさでこんなに盛り上がることはなかっただろう。きっと「こんなもん食えねぇよ、質より量かよ」という声が聞かれ、須原さんがうつむき加減でステーキをビールで流し込む姿が見られたかもしれない。単なる大きなステーキでも、良い思い出になった。

食事を終えてバスへ移動したが、佐藤智秀がなかなか来なかった。大量の肉を食べたせいかお腹の定期便が騒ぎ出し、長いトイレタイムになったのだ。結局、走って店から出てきて最後にバスに飛び乗った。13 時に、ビッグステーキの思い出をくれたポートピリーを出発し、一度休憩を挟んだ以外は、満腹後の夢の中、アデレード空港に向かってひたすら 1 号線を南へ下って行った。

日本へ…帰国の途

アデレード空港に着いたのは 16 時、ずっと楽しい雰囲気で盛り上げてくれたガイドの京子さん、運転しながらずっと話しつづけていた陽気なルーさん、シャイだけど笑うと可愛く真面目で黙々と運転したダレンさん。この 3 名とは、アデレード空港でお別れだった。

搭乗する再集合時間の 17 時 20 分まで、少し残った現金を使い切る為に買い物をした。20 日にシドニーから着いた時に、めぼしいショップをチェックしてあったので、その店に直行した。こまごましたものも含めて買い物し、現金を使いきってめでたしめでたし。渡

ウーメラからの帰路，ラグーンアイランド塩湖の見える場所で停車．参加者全員で最後の記念写真を撮る

辺会長は「 FODO 」の“ ロゴ入り暖かジャケット ”を何度か迷いながらも自分のご褒美として(AU ＄ 180)買った。そうだ、自費で天文インストラクターのお仕事を引き受け、手のかかるメンバーを札幌から連れてきてくれ、晴れる望みが無いのに数名の為に夜の観測に同行して面倒を見、奥様の美香さんが居ないホテルの部屋で一人寂しい夜を過ごし、ゲボ髪のまま機材のチェックをし、これでご褒美は貰えないのだ。せめて、自分にご褒美を買ってもバチはあたらないはず。

集合後、アデレード発シドニー行きカンタス航空 QF766 に乗り、17 時 50 分離陸した。窓から見える夜景がとても美しかった。日本の都会のような派手なネオンが無く、光が静かに瞬いていた。空がまた美しく、夕焼けの赤と快晴の青とのコントラストの世界に引き込まれ、溜息が出るほどだった。南天の星の美しさに感動し、またこうして違う美しさに感動できるとは思っていなかったので、星空とはまた別の嬉しさが込み上げてきた。暫くして周りの席を見回すと、殆どの人が死んだように眠っている。添乗員の須原さんは、旅にはいつもお供として欠かせないという 3 カードのゲームに真剣に取り組んでいた。もしかして、彼はギャンブラーなのか？ 18 時 30 分に、パン・チキンサラダ

コートを買うか買うまいか阿部さんに相談する渡辺会長

・コーヒー・デザートにチョコレートの機内食を食べ、19 時 55 分に、夜のシドニー空港に到着し、バスで国際線ターミナルに移動した。

刻一刻と帰国の時間が迫ってきていた。最後のお土産選びをし、佐藤智秀・麻子も自分たちのご褒美に(何も働いていないが)須原さんお勧めの、日本には殆ど入ってきていない「 Shiraz 」の赤ワインを 1 本買い、更にバイク好きの佐藤智秀は、展示してあった「ルート 66 」の看板とハーレーの新型バイクの前でガキのように嬉

シドニー空港の免税店ロビーに飾れらていたハーレー

しそうな顔で、ポーズをとって写真を写して貰っていた。市川さんと阿部さんは、今回の旅行を充分楽しめただろうか。市川さんと過ごしていて感心したのは、お年の割に(失礼)、とてもエネルギッシュだということだ。その理由が分かったのは食事の時で、とにかく

満足気な顔つきにも一抹の寂しさが…

好き嫌いが無く、何も文句も言わずにしっかり召し上がっているのだった。だから一人で海外に飛び回って楽しく過ごせるのだろう。阿部さんも、初海外旅行とは思えないほど落ち着いていて、周りに気を遣ってくれながらもご自分も楽しんでいるようにみえた。こんなことを考えながら待ち時間を過ごしていたが、次の飛行機に乗ってしまうと、日本での現実が待ち構えているのだ。ふと、心が重たくなるような寂しさを覚えた。

21 時 45 分に、再集合。日本へ向かう飛行機に乗らなくてはならなかった。そしてシドニー発成田行きカンタス航空 QF021 に搭乗。旅行の時、いつも帰りの時間が嫌いだ。お金と時間と勇気が溢れるほど自分に備わっていれば、そこに留まっていたいと思ってしまう。でも、結局は日々の生活が待っている現実に帰り、また次の旅行計画に楽しみを見出しているのだ。帰るとなると皆んな思いは同じようで、表情に疲れと寂しさが表れていた。

少し離れた座席にいた渡辺会長の姿が、22 時 55 分に離陸してから間もなく見えなくなったが、4 つ並んだ中央の席が空いていたので移動し、横になって爆睡したようだ。他のメンバーも例外なく眠っていたが、4 時の朝食で起こされた。日本に近づけば近づくほど寂しさが増してきた。そして朝の 6 時 10 分、湿気の多い、空気の美味しくない成田空港に、皆んなの「あ～着いたか～」という溜息混じりの声と共に着陸してしまった。

⑦５月２５(火)

成田でお別れ

東京ディズニーシーへ

佐藤智秀・麻子はせっかくのなのでもう１泊し、東京ディズニー・シーへ行くことになっていた。成田で皆さんと別れて、旅をしめくくりました。

南天の星たちに…

今回の海外遠征は、二つの彗星が同時に、しかもオーストラリアの空で見ることができることに魅力に感じていた。しかし、冷静に考え始めると観光が殆ど無く、聞いたことも無いオーストラリアの人口 200 人の田舎村に 3 泊もするという日程で、その上 3 晩とも曇ってしまったらどうするのだろう、という思いが巡っていた。何もすることが無いではないか？ 一晩でも良いから、晴れることを祈るだけだった。

しかし、始めの滞在地だった南オーストラリアの州都アデレードは、歴史を感じる美しい町並みで品が良く、治安も良いのでもう一泊くらいして夜の街にも出かけたくなる場所だったし、ウーメラは住人の姿を余り見かけることのあまり無い村だったが、一つも高層建築物が無く空気も爽やかで過ごしやすく、久し振りにゆったりした時を感じることができた。

そして南の満天の星空。周りには地平線しか見えず、その上から天頂、そしてまた地平線まで…と空が星で埋め尽くされていた。周りの人さえ目に入らず、自分の為の星空だ！ と錯覚してしまう程の感動だった。一

どこまでも続く一本道．山や丘もなく見渡す限り３６０°地平線という景色は生まれて初めてみる光景だ

つの村に南天の星空観測の為だけに数日滞在し、夜空を邪魔する光害が全く無い中、日本では見ることの出来ない星たちを観望するなどということは、なかなか経験できることではない。もう、そのような機会は無いかも知れない。それは、とても贅沢な経験をしたのだと思う。

出国前は、こんなにも南天の星空に感動して帰ってくるとは全く思っていなかった。それほど、想像以上というか、期待以上の美しい世界だった。「見た人にしか分からない」と、皆既日食観測ではよく言われるが、今回の南天の星空に関しても、同じようなことを感じた。「南天の数え切れないほどの美しい星たちは、見た人にしか分からないとしか言いようがない。素晴らしい感動を与えてくれた、その星たちにこころから感謝したい…」。そして、いつかまた南天の美しい星たちに再会したい、と思った。

★ 補　足

渡辺和郎　記

成田到着の後

成田の入国では、佐藤と渡辺のスーツケースに破損があったので、バゲージクレイムで時間がかかった。さすが撮影機材で 30kg ちかい重量では、落下した際に大きな衝撃となるのだろう。渡辺のものに至っては積まれた荷物の上部から落下したのだろうか。そうとしか思えないくらい、スーツケース全体が歪んで変形していた。そのうえ蓋が半分開いた状態でこれは重傷だ。もし、空港係員がかまわず荷物を放り投げているのだったら怖い(ちなみに、帰宅後宅急便で指定の修理屋へ送って 2 週間ほどで修理され返ってきた)話だ。

佐藤夫婦が東京ディズニーシーに遊びに行くというので、ここから二人に見送られて、渡辺・市川・阿部の 3 名で千歳を目指した。第 2 ターミナルの 1 階国内線前にあるリムジンバス乗り場までカートを押して 3 人で移動し、ほどなく 7 時 30 分発の羽田行きのバスに乗ることができた。来た道のりを逆に高速を走って 9 時少し前に羽田の出発ロビーに到着した。ところがチェックインカウンターへ行ってビックリ。その場で空いた機に乗ろうと企んでいたが、全便満席というではないか。仕方ないので空席待ちをかけて 12 時の予定便までの 4 便を待つことになった。

機材を積んだカートを押して搭乗待合室の空席待ちカウンター前で、呼び出されたら直ぐに乗れるよう待機することになった。待ち時間を利用して市川さんがトイレに行ったと思っていたら、やおら ”とらや ”の紙袋を僕と阿部さんに渡して丁寧なお礼を言われた。お世話になったから…というが、それはお互い様なのに。年輩者の気遣いは違うなぁ～と感心した。ありがとうございました。

9 時 20 分になって 5 名だけ空席があって一般客 2 名と僕ら 3 人がギリギリ乗れることになった。危なかった。9 時 35 分羽田発 JAL1013 便で千歳を目指した。11 時にほどなく着いて、市川・阿部さんはそれぞれ空港から円山公園、麻布行きのバスに乗って、そこからタクシーで帰ると言っていた。僕は壊れかけたスーツケースとカメラのアルミケース、肩からバッグ、紙袋など両手いっぱいの荷物を持って JR で新さっぽろを目指し、駅から自宅までタクシーを使った。

札幌天文倶楽部　会報「デネブ」　増刊号

２大彗星とオーストラリア南天紀行
発 行 日　2004(平成 16)年 11 月 10 日 (印 刷)
発 行 者　渡辺 和郎　kazurou@bf.mbn.or.jp
編集委員　末澤朋代　今野利秋　川口裕美　神島麻子
発 行 所　札幌天文倶楽部　事務局
〒 062-0933
札幌市豊平区平岸３条 13 丁目１－ 16
佐藤 智秀　方
電話 携帯０９０－８８９８－０９０４